



梅澤本新撰朗詠集の訓讀語について

小林 芳規

まえがき

- 一、梅澤本と寛永板本との訓讀の相違
- 二、梅澤本の漢詩句とその典據となった漢籍・國書との訓讀の一致
- 三、梅澤本における別訓の存在
- 四、梅澤本と山名切との關係
- 五、國語史料としての梅澤本の訓讀語
- 六、梅澤本の訓讀語について——訓下し文のために——

ま え が き

本稿は、もと古典文庫刊梅澤本新撰朗詠集(昭和三十八年刊予定)の訓讀文の解題を意図して成ったものであるが、都合により彼の本文とは離して本誌に掲載させていただいたものである。

梅澤本新撰朗詠集とは、梅澤彦太郎氏蔵鎌倉時代書寫加點の新撰朗詠集一帖で、奥書に

(墨)「為_レ備_二老後之_一忽望 更染筆

嘉祿二年(一二三六)三月十四日戸部尙書藤

(朱)「加點訖」

此點前左金吾基 此集撰者 被授于先人

之説也」

(別後密)

「此本二條家為道朝臣

眞蹟也

寛永第十二小春上澣²⁾丑相藤(花押)」

とある書をいう。本書の書誌的解説については古典文庫刊前掲書に松田武夫博士の詳説があるので参照されたい。

本稿の主要點は第一項から第四項までで、次の點である。即ち、新撰朗詠集の漢詩句の訓讀は梅澤本によれば、その典據となった漢詩句の古い訓法と一致し、かつ新撰朗詠集の漢詩句の訓法には二つの異なった系統があつた。一は菅原家の訓法で、この梅澤本の墨訓朱點で示された大部分の訓であり、他は編者藤原基俊の書寫加點と傳える山名切、および梅澤本の朱訓と朱合點付の別訓が示すものである。今日通行の寛永板本の訓讀は、梅澤本とは別系統の訓法を基としながらも二系統の訓法の取合せを行い、かつ改竄・誤寫を含んだ不純な内容を持っているものである。

一、梅澤本と寛永板本との訓讀の相違

新撰朗詠集の漢詩句の訓讀は、今日一般には、「于

時寛永八^辛孟春吉日」(前文略)の刊記を持つ板本の訓
 によって知られている(例・日本歌謡集成等・外に安
 永六年刊本と群書類従本と等が知られるが、前者は寛
 永板に基づいたものと見られ、後者も訓讀は寛永板の
 それと大同である)。寛永板の訓は極めて詳細ではあ
 るが、梅澤本の訓法と比較すると著しく相違すること
 は無論、外に改竄や誤寫も含まれている。

梅澤本の訓讀と寛永板本の訓讀との相違は次のよう
 な幾つかの型に整理できる。

- (一) 梅澤本が字音讀の語を、板本では和訓にする。
- (二) 梅澤本が助詞のない所を、板本は助詞を讀添え
 る。
- (三) 梅澤本が助動詞のない所を、板本は助動詞を讀
 添える。

(一) 梅澤本が字音讀の語を、板本では和訓にする。

(梅澤本)

(寛永板本)

(類従本)

(四) 対句の上句の句末を、梅澤本が終止形を用いる

のに対して、板本は連用中止形を用いる。

(五) 讀添の助詞の異同

(六) 讀添の助動詞の異同

(七) 讀添の「こと」の異同

(八) 傍訓の異同

(九) 音の異同

(十) 助字訓の異同

(十一) 右の(一)(二)(三)(四)の逆の例も各々存する。

以下、各項についてその相違を例示する。なお参考ま
 でに下段に群書類従本の訓を示した。(数字は各詩歌
 句頭の、梅澤本の行数字を表わす)

一八八 粧シメツ。 暇ヒマ

二四七 語コト (音)

二五九 認ミト (セシメムと)

三〇六 飄ヒルスル影

三五三 残ノコル菊

五四一 日ヒノ光

五四四 一ヒトノ冲

七〇九 暁アカツキノ猿

九三四 東アキタノノ船 西ニシタノノ船

粧シメツ 暇ヒマ

語コト

認ミトメムト

飄ヒルル影

残ノコレル菊

日ヒノ光

一ヒトノ 冲ヒイッテ

暁アカツキノ猿

東アキタノノ船 西ニシタノノ船

粧シメツ 暇ヒマ

語コト

認ミトメムト

飄ヒルル影

残ノコレル菊

日ヒノ光

一ヒトノ 冲ヒイッテ

暁アカツキノ猿

東アキタノノ船 西ニシタノノ船

(二) 梅澤本が助詞のない所を、板本は助詞を讀添える。

四〇九 空カラノ階カイ 雨アメノ脆ヒソカ (く)シテ

四三〇 嬋メグロノ閨イハ 枕マク冷ヒヤシ

孤コノ館タン 夢ユメ残ノコレリ

四五二 嬋メグロノ閨イハ 雪ユキ冷ヒヤ (く)シテ

五八一 吳ミノ郡クニ 望ノゾミ青アヲシ

五九六 吳ミノ岫タテ 雨アメ来キテ

空カラノ階カイ 雨アメノ脆ヒソカクシテ

嬋メグロノ閨イハ 枕マク冷ヒヤマシ

孤コノ館タン 夢ユメ残ノコレリ

嬋メグロノ閨イハ 雪ユキ冷ヒヤウシテ

吳ミノ郡クニ 望ノゾミ青アヲシ

吳ミノ岫タテ 雨アメ来キテ

空カラ階カイニ 雨アメ脆ヒソカクシテ

嬋メグロ閨イハニ 枕マク冷ヒヤシ

孤コ館タンニ 夢ユメ残ノコレリ

嬋メグロ閨イハニ 雪ユキ冷ヒヤ(く)シテ

吳ミ郡クニニ 望ノゾミ青アヲシ

吳ミ岫タテニ 雨アメ来キテ

六三八 南[△]行^一雨^一冷^シ

北[△]遠^一嵐^一餘^レリ

七三〇 柴^一門[△]人[△]、到^ラ不^レ

九〇六 暁^一洞[△]窓^を貫^ク……影

二六八 宵^一深^ッケテは

秋[△]浅^くシテは

三三四 砧[△]郷^一涙^を添^ふ

鶴[△]皁^声を照^す

三五六 長男[△]凡^一草^老（い）たり

少子[△]一^一叢^残レリ

四〇六 浪^ノ文[△]焼^一盡^す

潭^ノ色[△]変^シ来^る

七三五 牛[△]門^荻に休^す

犬[△]園^一林^に吠^ゆ

七三〇 空^一林[△]獨^り白^雲与^ト期^す

南^ニ行^一雨^一冷^シ

北^ニ遠^一嵐^一餘^レリ

柴^一門^ニ人^到ラ不^レ

暁^一洞^ニ窓^ヲ貫^ク……影^ケ

夜^ハ深^ケ又

秋^ハ浅^シ

砧^ハ郷^一涙^ヲ添^フ

鶴^ハ皁^聲ヲ照^へす

長男^ハ凡^一草^老ト

少^一子^ハ一^一叢^残レリ

浪^ノ文^ハ焼^キ盡^{クス}

潭^ノ色^ハ変^シテ来^ル

牛^ハ休^ム門^荻ノ

犬^ハ吠^ユ園^林ノ

空^一林^ニ獨^り白^雲与^ト期^ス

南^ニ行^一雨^一冷^シ

北^ニ遠^一嵐^一餘^レリ

柴^門ニ人^到（ら）不^レ

暁^洞ニ窓^を貫^く……影

夜^ハ深^又

秋^ハ浅^シ

砧^ハ郷^涙を添^フ

鶴^ハ皁^聲を照^ス

長男^凡草^老

少^一子^一叢^残

浪^ノ文^ハ焼^盡クス

潭^ノ色^ハ変^シテ来^ル

牛^ハ休^ム門^荻ノ

犬^ハ吠^ユ園^林ノ

空^林ニ獨^り白^雲与^ト期^ス

四八五 胡塞に[△]花に[△]嘶[△](え)て

巴[△]山に[△]月に[△]哥[△](ひ)て

六三二 藍[△]水[△]は水[△]冴[△]ユル思[△]ヒ

玉[△]山[△]は唯[△]雪[△](の)消[△](め)る情

三八〇 魏[△]官[△]名[△]頭[△](は)る

燕[△]夢[△]子[△]傳[△]フ

八七三 昔[△]伊[△]尹

四二八 沙[△]漠[△]日[△]西[△]なり

八七二 名[△](訓)[△]京[△]師[△]を[△]動[△]す

(三) 梅澤本が助動詞のない所を、板本は助動詞を讀添える。

三三四 念[△](ひに)随[△](て)盡[△]キ[△]

三二九 扇[△]は[△]忘[△]る[△]

三三七 葩[△]は[△]迷[△]フ[△]

六九一 江[△]水[△]逝[△]ク[△]「イヌ」

胡[△]塞[△]ニ[△]ハ[△]花[△]ニ[△]嘶[△]ユ

巴[△]山[△]ニ[△]ハ[△]月[△]ニ[△]哥[△]フ

藍[△]水[△]ニ[△]ハ[△]水[△]ノ[△]冴[△]ユル思[△]ヒ

玉[△]山[△]ニ[△]ハ[△]唯[△]雪[△]ノ[△]消[△]ル情

魏[△]官[△]ノ[△]名[△]ハ[△]頭[△]ル

燕[△]夢[△]ノ[△]子[△]ハ[△]傳[△]フ

昔[△]ハ[△]伊[△]尹[△]ハ

沙[△]漠[△]ハ[△]日[△]ハ[△]西[△]ノ

名[△]ヲ[△]京[△]師[△]ニ[△]動[△]ス

念[△]ニ[△]随[△]テ[△]盡[△]キ[△]ヌ[△]ル[△]コト[△]ヲ

扇[△]ハ[△]忘[△]レ[△]ヌ

葩[△]ハ[△]迷[△]ヒ[△]ヌ

江[△]水[△]逝[△]キ[△]ヌ

朝[△]塞[△]ニ[△]ハ[△]花[△]ニ[△]嘶[△]ユ

巴[△]山[△]ニ[△]ハ[△]月[△]ニ[△]歌[△]フ

藍[△]水[△]ニ[△]ハ[△]水[△]ノ[△]冴[△]ル思[△]

玉[△]山[△]ニ[△]ハ[△]唯[△]雪[△]消[△]情

魏[△]官[△]ノ[△]名[△]ハ[△]頭[△]ハ[△]ル

燕[△]夢[△]ノ[△]子[△]ハ[△]傳[△]フ

昔[△]ハ[△]伊[△]尹[△]ハ

沙[△]漠[△]ハ[△]日[△]ハ[△]西[△]ノ

名[△]ヲ[△]京[△]師[△]ニ[△]動[△]カ[△]ス

随[△]レ[△]念[△]盡[△]ヌ[△]ル[△]コト[△]ヲ

扇[△]ハ[△]忘[△]レ[△]ヌ

葩[△]ハ[△]迷[△]ヒ[△]ヌ

江[△]水[△]逝[△]ヌ

六四三 終一南(の)「之」山を以(こ)す

涇一渭(の)「之」川を以てす

七二 何(そ)病を謝(す)る

三九三 斜一岸(の)「之」雪遠一近

一七九 婆一娑(す)

五五二 孟嘗君か関を出(つ)る「之」程

終一南「之」山ヲ以テセリ

涇一渭「之」川ヲ以セリ

何ソ病ヲ謝セン

斜一岸「之」雪遠近ナリ

婆娑タリ

孟一嘗一君か関ヲ出シ「之」程

終南之山ヲ以セリ

涇渭之川ヲ以セリ

何病ヲ謝セン

斜岸之雪遠近ナリ

婆娑タリ

孟嘗君か関ヲ出シ「之」程

(四) 对句の上句の句末を、梅澤本が終止形とする所を、板本は連用中止形とする。

一八〇 逸一馬 嘶一晨一風(の)「之」

中……征一衣過ク夕陽

の「之」下に

一九二 雀(の)病を扶(た)ケ令(し)ム

二〇五 絺一衣新(た)に製(す)

二四三 秋(の)風 脆(も)シ

三七〇 秋(に)入(て) 發(は)ケ

四三五 溪一霧(の)底(に)帰(る)

五四四 晴(の)後(に)失(へ)又

逸一馬晨一風「之」中ニ嘶ヘテ……

征一衣夕陽「之」下ニ過テ

病一雀ヲ扶ケ令メ

絺一衣新ニ製シテ

秋ノ風脆ク

穉ニ入テ發ケ

溪一霧ノ底ニ帰リ

晴レノ後ニ失セ

逸馬晨風之中ニ嘶ヘテ……

征衣夕陽之下ニ過テ

病雀ヲ扶(け)令

絺衣新ニ製シテ

秋ノ風脆ク

入レ穉發ケ

溪霧ノ底ニ帰

晴レノ後ニ失セ

(五) 読添の助詞の異同

六三三	艶一流を「於」言一泉に潤す
六六四	霜を帯(ひ)て碎ク
六六八	暁の箭を催す
六九七	山の浅キことを嫌フ
七三三	窓を穿(ち)て入る
七九〇	僧寺に帰る
一七〇	空に雪に鎌シ
一九九	波の聲に洗(ふ)
九七七	輶に「於」吳坂に倚ル
三〇六	幌を飄スル影
三四五	芬一芳 屑(訓)を染む
八七二	名京一師を動す
五七二	蔡一氏の「之」曲に

艶一流ヲ「於」言一泉ニ潤シ
霜ヲ帯テ碎ケ
暁ノ箭ヲ催シ
山ノ浅キヲ嫌ヒ
窓ヲ穿テ入り
僧寺ニ帰り
空(シ)ク雪ヲ鎌ス
波ノ聲ヲ洗フ
輶ヲ「於」吳坂ニ倚セテ
幌ニ飄ヘル影
芬一芳 屑ニ染ム
名ヲ京一師ニ動かス
蔡一氏カ「之」曲ニ

艶流ヲ「於」言泉ニ潤シ
霜ヲ帯テ碎ケ
暁ノ箭ヲ催シ
山ノ浅(を)嫌ヒ
穿レ窓入り
僧帰レ寺
空ク鎌レ雪
波ノ聲ヲ洗
輶ヲ「於」吳坂ニ倚セテ
幌ニ飄ル影
芬芳屑ニ染ム
名ヲ京師ニ動かス
蔡氏カ「之」曲ニ

二〇五 伶倫の竹

伶倫カ竹ト

伶倫カ竹ト

六〇二 湘山の遠(き)より起り

湘山ノ遠キニ起リ

湘山ノ遠キニ起リ

八〇〇 帰老の休臣の霜の後の眼

帰老ノ休臣ハ霜ノ後ノ眼

帰老ノ休臣ハ霜ノ後ノ眼

〃 陵園の配妾の月の前心

陵園ノ配妾ハ月ノ前ノ心

陵園ノ配妾ハ月ノ前ノ心

二三八 盛夏の花は留む

盛夏ニハ花留ム

盛夏ニハ花留ム

〃 嚴冬の子は焚す

嚴冬ニハ子焚ス

嚴冬ニハ子焚ス

三七〇 黄色は花の中に比方無シ

黄色ノ花ノ中ニ比方無シ

黄色ノ花ノ中ニ比方無シ

三六五 寒燈を「ハ」夜半の花

寒燈ノ夜半ノ花

寒燈ノ夜半ノ花

五五八 庭前に竹撼カス「す」

庭前ノ竹ハ撼ク

庭前ノ竹ハ撼ク

五七九 湖邊には人、三分の緑を踏む

湖邊ノ人ハ三分ノ緑ヲ踏ム

湖邊ノ人ハ三分ノ緑ヲ踏ム

六六一 擧帆「ハ」帆ヲ擧ケテ「往」反

帆ヲ擧ケテ往「反」スルヤ秋ノ風

擧帆往「反」スルヤ秋ノ風送

スレハ秋の風送る

送り

二二二 晨に興クレは

晨ニ興ルニ

晨ニ興ルニ

三三八 香一山に住(む)に

香一山ニ住テ

住ニテ香山

四九五 春來(リ)ては日暖(ア)に(じ)て

春來リ日暖ニシテ

春來リ日暖ニシテ

四六六 簾を卷(い)ては

簾ヲ卷ケハ

卷ハ簾

(六) 読添の助動詞(形容動詞語尾)の異同

七五五 山一月 曙(サ)又

山一月 曙ケタリ

山月曙ケタリ

三三二 乾一坤 洞一朗とシテ

乾一坤 洞一朗ニシテ

乾坤洞朗ニシテ

(七) 読添の「こと」の異同

七〇八 孤竹(の)「之」潔(き)ことを全

孤一竹ノ「之」潔キヲ全クセ

孤竹之潔キヲ全クセリ

(く)セリ

三三八 賜フコト帝恩(に)在(レ)ハ

賜ハ天一恩ニ在レハ

賜ハ在ニ帝恩

四六七 去て奔一車に似たり

去ルコトハ奔一車ニ似タリ

去コトハ奔車(に)似リ

六三三 浮(み)て蟻の如(シ) (末)

浮フコト蟻ノ如シ

浮コト如レ蟻

薄(く)して蟬に似たり

薄キコト蟬ニ似タリ

薄コト似レ蟬

(八) 傍訓の異同

- 二〇九 清一涼を越ム
- 二二三 涼(しき)處(に)慙ム
- 三三七 粧は誤ル
- 四九六 暗ニ泮エテ
- 五三〇 凍を解(き)ては
- 五四六 銀水 洗一除ヒテ
- 六一五 文を贍ヘシ家
- 六九八 藥を擣ツを
- 二〇四 穩ヒカナリ
- 四一四 聲 急(劇)(か)なり
- 四九六 偷ニ穿テ

- 清一涼ヲ越メシム
- 涼キ處ニ慙フ
- 粧ハ誤ツ
- 暗ニ泮ケテ
- 凍解ケテハ
- 洗ヒ除イテ
- 文ニ贍イシ家
- 藥ヲ擣クヲ
- 穩カナリ
- 聲 急ハシ
- 偷ニ穿ツテ

- 清涼ヲ越シム
- 涼處ニ慙フ
- 粧ハ誤ツ
- 暗ニ泮ケテ
- 凍解ケテハ
- 洗ヒ除テ
- 文ニ贍ヒシ家
- 藥(を)擣クヲ
- 穩ナリ
- 聲 急シ
- 偷ニ穿テ

(九) 音の異同

- 五八七 控一駟
- 七七〇 嚴一飾

- 控ヲ駟
- 嚴ヲ飾

- 控 駟
- 嚴 飾

七八四 齋イハヒ

齋イハヒ

齋

二四四 紆フフテ

紆フフテ

紆フフテ

四七二 遠トホ一憐アハレフ

遠トホク憐アハレレム

遠トホク憐アハレレム

二八九 頭カビを揺ユリテ

頭カビヲ揺ユツテ

頭カビ(を)揺ユツテ

(十) 訓法の異同

八五一 父チチ一老オホを賞シヤク(レ)シ「以イ」テ

父チチ一老オホヲ賞シヤクシテ以イテ

賞シヤクニ父チチ老オホ一以イ

八五三 羽ウ一翼ヨクを待マツ(チ)「以イ」テ

羽ウ一翼ヨクヲ待マツテ以イテ

待マツニ羽ウ翼ヨク一以イ

(十一) 右の(一)(二)(三)(四)の逆の例

(一) 梅澤本が和訓の語を、板本は字音讀とする。

二〇五 咲サキヒ一殺コロサシム

咲サキヒ一殺コロス

咲殺ス

九三二 餘アト喘ハクキ

餘喘ス

餘喘ス

(2) 梅澤本が助詞を讀添える所を、板本は助詞を用いない。

三三八 盛夏トキの花ハナは留トドマむ、三伏サンフツの雪ユキを

盛夏トキニハ花ハナ△留トドマムニ一伏フツノ雪ユキ△

盛夏トキニハ花ハナ留トドマム三伏サンフツノ雪ユキ△

嚴シブキ一冬フユの子コは焚ヤクす、一株イツクサの金カネ

嚴シブキ一冬フユニハ子コ△焚ヤクス一株イツクサノ金カネ

嚴シブキ冬フユニハ子コ△焚ヤクスニ株イツクサノ金カネ

三五八 恒娥は夜々艶を偷ム應へし

方一士は年々粧を採へらむと

欲

二〇八 覓ムルに處無(き)コト

四八四 闇一夜には獨(り)行ク

人一問には却(り)て踏む

一八八 風舞一腰(を)嫋(つ)めては

露粧一睨(を)消(し)ては

二六八 宵深(け)ては月桂の

秋一浅(く)しては風槐の

九七九 吳の強一(大)ラシモ

越の會一(稽)に棲(ム)シモ

(3) 梅澤本が助動詞を讀添える所を、板本は助動詞を用いない。

恒娥^カ夜^ク々^ク艶^ヲを偷^ム應^ヘシ

方一士^ハ年^々々^ク粧^ヲを採^ラムと

欲^ス

覓^ムルに^ニ處^ニ無^キコト^ヲ

闇^ニ一^ニ夜^ニ獨^ニ行^ク

人^一問^ニは却^テ踏^ム

風^舞一^ノ腰^ヲ嫋^メテ

露^粧一^ノ睨^ヲ消^シテ

夜^ハ深^ケ又^ニ月^桂ノ

秋^ハ浅^シ風^一槐^ノ

吳^ノ強^大ナル

越^ノ會^一稽^ニ棲^ムジ

恒娥^カ夜^ク々^ク應^レ偷^レ艶^ヲ方士

八^年々^ク欲^レ採^レ粧

覓^ム處^ニ無^キコト^ヲ

闇^ニ一^ニ夜^ニ獨^ニ行^ク

人^一問^ニは却^テ踏^ム

風^舞一^ノ腰^ヲ嫋^メテ

露^粧一^ノ睨^ヲ消^シテ

夜^ハ深^ケ又^ニ月^桂ノ

秋^ハ浅^シ風^一槐^ノ

吳^ノ強^大ナル

越^ノ會^一稽^ニ棲^シ

五三六 駕^ヒムコトを窺^フ

五五三 五馬嘶^エテ而^{シテ}去^ラむと欲^ム

駕^{スル}コト^ヲ窺^ヒ

五^一馬^嘶エテ而^{シテ}去^ラムと欲^ス

駕^ムコト^ヲ窺^ヒ

五^一馬^嘶而^{シテ}欲^レ去^ラ

七四二 舊^{モトヨリ}来^ル(^ウ)む隣ナレハ

三三〇 苜^{サウ}馬嘶^ハ(^エ)而惑^{マド}ヒナムト欲^ス

五三〇 晴^ハを迎^ム(^ヘ)ては拂^ハ盡^ス「シツ」(未)

(別訓「す」)

五八一 風^{カゼ}に放^ツてる馬

三九七 紅^{ベニ}を隔^ケ(^テ)て觸^フ(^レ)たる

七〇七 羌^{キヤウ}則^レ天^{テン}と称^ナセシカトモ「而」

(4) 対句の上句の句末を、梅澤本が中止形で、板本は終止形とする。

三二六 皆^ミ万^{マン}頃^{クワ}の「之」霜^{シユウ}を踏^フミ……

各^{タビ}一^{ヒト}家^カの「之」月^{ツキ}を得^ユたり

四三九 残^ノ燈^{トウ}光^{クワウ}正^{テイ}に背^セケ

四七一 帳^{テウ}の上^ノに正^{テイ}に雪^{ユキ}を飄^ヒシ

四八二 花^{ハナ}を拂^ハ(^ヒ)て驚^{オドロ}(^キ)て河^{カハ}を出^デテ

六二九 醉^{スイ}(^ヒ)て斜^{ナカ}に菊^{キク}を吹^フキ

五三六 低^ヒ一^{ヒト}昂^{カウ}歩^ポを逐^ツ(^ヒ)て

八一六 君^{キミ}に勸^{コト}(^メ)ては更^マに盡^ツクセ一^{ヒト}盃^{サイ}の酒

舊^{モトヨリ}来^ル隣^{トナリ}ナレハ

苜^{サウ}馬嘶^ハヘテ而惑^{マド}ハント欲^ス

晴^ハヲ迎^ムテハ拂^ハヒ盡^ス

風^{カゼ}ニ放^ツツ馬

霜^{シユウ}ヲ隔^ケテ、觸^フレ

羌^{キヤウ}天^{テン}ト稱^ナフトモ「而」

皆^ミ万^{マン}頃^{クワ}ノ「之」霜^{シユウ}ヲ踏^フム……

各^{タビ}一^{ヒト}家^カノ「之」月^{ツキ}ヲ得^ユタリ

残^ノ燈^{トウ}光^{クワウ}正^{テイ}ニ背^セケリ

帳^{テウ}ノ上^ノニ正^{テイ}ニ雪^{ユキ}ヲ飄^ヒヘス

花^{ハナ}ヲ訪^{トウ}テ驚^{オドロ}イテ河^{カハ}ヲ出^デツ

醉^{スイ}イテ斜^{ナカ}ニ菊^{キク}ヲ吹^フク

低^ヒ一^{ヒト}昂^{カウ}歩^ポヲ逐^ツフ

君^{キミ}ニ勸^{コト}ム更^マニ一^{ヒト}盃^{サイ}ノ酒^{サケ}ヲ盡^ツクセ

舊^{モトヨリ}ヨリ来^ル隣^{トナリ}ナレハ

苜^{サウ}馬嘶^ハヘテ而欲^{マド}レ惑^{マド}ント

晴^ハヲ迎^ムテハ拂^ハヒ盡^ス

風^{カゼ}ニ放^ツツ馬

霜^{シユウ}(^を)隔^ケテ、觸^フレ

羌^{キヤウ}称^ナレ則^レ天^{テン}而

皆^ミ万^{マン}頃^{クワ}之^ノ霜^{シユウ}ヲ踏^フム……各^{タビ}一^{ヒト}

家^カ之^ノ月^{ツキ}ヲ得^ユタリ

残^ノ燈^{トウ}光^{クワウ}正^{テイ}ニ背^セケリ

帳^{テウ}ノ上^ノニ正^{テイ}ニ雪^{ユキ}(^を)飄^ヒス

花^{ハナ}(^を)訪^{トウ}フテ驚^{オドロ}テ河^{カハ}(^を)出^デツ

醉^{スイ}テ斜^{ナカ}ニ菊^{キク}ヲ吹^フク

低^ヒ昂^{カウ}歩^ポヲ逐^ツフ

君^{キミ}ニ勸^{コト}ム更^マニ一^{ヒト}盃^{サイ}ノ酒^{サケ}(^を)盡^ツセ

右の相違のうち、最も例が多く特徴的な(一)(二)(三)(四)を見るに、梅澤本は字音讀を用い、助詞・助動詞を省き、対句の上下二文を各終止形式とするのに対して、板本は和訓を用い、助詞・助動詞を讀添え、対句の上句を中止形式として全体を一、文に長く訓読する。両者を比較すれば梅澤本が訓點語的であるのに対して、板本は比較的和文的な訓法を持っていると見られる。これは新撰朗詠集の漢詩句の訓法に二つの異なった系統がある、一は梅澤本の訓讀の系統、他は板本の訓讀の系統であろうと考える。(五)から(十)までの各相違も右に應ずるものと考えることが可能である。この場合板本

(一) 梅澤本が字音讀、板本と山名切は共に和訓

の和文的訓法が、後世になって意圖的に作為されたものか、或いは梅澤本の訓法と並んで古くから存していたのを傳えたものかは解明されねばならない問題である。新撰朗詠集の漢詩句の古い訓法を示すものは、梅澤本の外に、完本ではないが平安時代の書寫加點の山名切がある。山名切の管見に入った全文およびその訓法の系統については後述(第四項)梅澤本と山名切との關係)するが、明らかに梅澤本とは異なった系統を示している。しかも板本の訓法で、梅澤本と異なっているものが、この山名切の訓に一致するものが目立つ。例示すると次の如くである。

(梅 澤 本)

五田一 日ノ光 (音合)

五田 一 一 冲 (音合)

(寛 永 板 本)

日ノ光

一 夕 一 冲 イ ッ テ

(山 名 切)

日(の)光ヒ

一 夕 一 冲 一 夕 一 一

(二) 梅澤本が助詞のない所を、板本と山名切は共に助詞を用いる。

二六八 宵[△]深[△]ケテハ
夜ハ深ケヌ

秋[△]浅[△]ヘクシテハ
秋ハ浅シ
宵^ヨハ深^フケヌ
秋^{アキ}ハ浅^{アサシ}シ

(三) 梅澤本が対句の上句を終止形、板本と山名切とは中止形

二〇五 新^ニハ^タニ製^スス
新^ニ製^シテ
新^タニ製^シテ

(四) 文字の異同(板本と山名切とが同じ)

五四一 雲^ノ間^ノ (右傍「際」
朱合点) 雲^ノ際^ノ
雲^ノ際^ノ

右から測るに、寛永板本の訓法は、梅澤本とは累系統
所が、梅澤本と板本と山名切との三本の訓法を比較
で古くから存した別系統を傳えていることが考えられ、
すると、古訓を示す梅澤本と山名切とは共に同じ訓で
先掲の梅澤本と寛永板本との類型的な相違は、右の事
あるのに、板本のみが異なる例がある。
情に基く結果であると見られるのである。

(梅澤本)

二〇四 銜^カ一^カ錠^ト。穩^トカナリ

二二三 松^ノ一^ノ杉^ノニ觸^ル

(寛永板本)

銜^カ一^カ錠^ト。穩^トカナリ

松^ノ一^ノ杉^ノニ觸^レテ

(山名切)

銜^カ一^カ錠^ト。穩^トカナリ

松^ノ一^ノ杉^ノニ觸^ル

五四二 布を曝す

五四三 晴の後に失(セ)又

五四一 山の色。

五四二 天台[◎]嶺の

五四三 数一點

五五一 暁一鐘

五四一 煙消(セ)ては

布ヲ曝ス

晴ノ後ニ失セ

山ノ色ハ

天一[◎]台ノ嶺ノ

数一[◎]點シテ

暁一[◎]鐘

煙ヲ消テハ

布ヲ曝ス

晴ノ後ニ失セ又

山ノ色[◎]

天一[◎]台ノ嶺ノ

数一[◎]點

暁[◎]鐘

煙ヲ消エテハ

右のうち、二〇四について見るに、梅澤本と山名切の

「オタヒカナリ」の語は古い語形で、「オタヤカナリ」

は後世の新しい形である(築島裕「平安時代の漢文訓

讀語につきての研究」)とされる。二〇四は白氏文集の

一節であって、確かに平安時代の文集の訓は「オタヒ

カナリ」が用いられている。さすれば二三以下の例そ

の他にも後改の場合を考慮することができる。(注)

又、三本の訓法を比較すると、板本は山名切に一致

しないが、梅澤本に一致するものがある。

五四五 計へムト欲

五四九 纒に明(か)なり

三二二 遅一明

計へムト欲

纒ニ明カナリ

遅一明

計へムト欲

纒ニ明ケヌ

遅一明

これに依り、板本が梅澤本の系統の訓をも取合せていることが推測される。更に、三本の訓がいずれも異なるものがある。

二〇五 咲^ヒ紋^ソサシム

咲^{セウ}一^ツ殺^{サツ}ス

二〇六 哀シブ

哀^{カサ}シム

咲^エミ^ソ紋^ソセシム
哀^{カサ}シム

板本の「咲^{カサ}一^ツ殺^{サツ}ス」の字音讀、「哀^{カサ}シム」の訓は恐らく後改の訓法であろう。梅澤本と板本との相違のうち

の訓をも一部に取合せているものと見られる。(注)

の例外的な(土)の訓法は、右の如き板本の諸事情から生じたものと考えられる。

寛永板本の改竄あるいは誤謄例は、訓讀以外に、作者名・詩句・和歌の字句においても指摘できる。

要するに、板本の訓讀は、梅澤本とは別系統の古訓法を基にして傳えなからず、後世の改竄や梅澤本系統

○ 作者名の異なるもの

(梅澤本)

九八〇 賈誼

同(前句は「劉越石」)

六〇三 金雲卿

金吾卿

八六九 因香典侍

長秋相公

九九八 義貞

藤義實

(群書類従本)

賈誼

同(蘇替)

因幡典侍

藤義實

九八〇は文送の鵬鳥賦によっているから作者を寛永板で前句と同じ劉越石とするのは誤である。六〇三は千載住句篇部によれば金雲卿が正しい。八六九は古今集・賀部に「春宮のむまれたまへりける時にまいりてよめる 典侍藤原よるか朝臣」とある。九九八は後拾遺集・雑三に藤原義定とある。さすれ

ば梅澤本が正しい形を傳えているのに板本では誤を傳えている。その他、同一人でも、梅澤本「俊中書王」を板本「六條宮」とし(三五)、梅澤本「遊女欲乘商船々人以槌打懸水、以袖掩面泣詠此歌 作者小町」を板本は単に「小町」とする(九三七)等もある。

○詩句・和歌の字句

- 二六一 孫惟垂兮
- 二四四 應ニ自佐一
- 二六七 叢芽
- 二五六 思ひにもゆる
- 二〇六 今日よりぞ待つ
- 二三二 夕くれは
- 一〇四〇 爰に消え

絲帷垂兮
應ニ自輕一
叢蘭
みさほにもゆる
今日はまっかな
ゆふされば
ここにきて

絲帷垂兮
應ニ自輕一
叢蘭
みさほにもゆる
けふよりぞ待
夕されば
爰に消え

二四四の板本の「輕」は平声字であるから、二二〇で梅澤本の「怪」の去声字でなければならぬ。

草体の類似から誤ったものであろう。二六一の「孫惟」は王船の対語で孫康の書齋の帷の意である。

から梅澤本の「孫」が正しい。板本「絲」は字体の類似に基く誤写であろう。二六とは「新撰万葉集上」(寛文板本)には「叢芽處處萼初テ開」とある。和歌の二五は重之集へ西本願寺三十六人集)に「おもひにもゆる」と梅澤本と同文であり、二六は和泉式部集卷一夏に「けふよりぞ待」へ「和泉式部全集本文篇」によれば定本はすべてこうあり内閣文庫本のみ「なく」とある。三三は後拾遺集夏に「ゆふくれば」とある。一〇四は板本の「きて」では意味が通じ難い。恐らく「え」を「て」に誤ったものであろう。

二、梅澤本の漢詩句と、その典拠とな

った漢籍・国書との訓読の一致

新撰朗詠集に所引の漢詩文の、典拠となった漢籍・

国書には、各々訓點を加えてその訓読を示した資料が今日幾つか残存している。その中の新撰朗詠集に引か

れている部分の訓読と梅澤本の訓読とを比較すると、全く一致するものがある。先ず、新撰朗詠集所引の漢籍中最も多く引かれている白氏文集について、その訓読を比較してみると次のようである。

(一) 訓読が一致するもの

(1) 影南一山を浸シテ青ヘウしして混一滾たり。波面

一日を沈めて紅ヘにして發一冷たり 白 昆明春満 (一六三)

は、白氏文集卷三の昆明春水満の一節である。これを現存最古の訓點を持つ神田喜一郎博士蔵白氏文集天永三年點と比較すると訓読は次の如く全く一致する。

影・南一山を浸ヒタして青アヲウシテ混マシ一滾たり。波ミ、

西一日を沈シメテ紅ニしテ發シ一冷たり(神田喜一郎)

又、新撰朗詠集の、

(2) 粧一閣 妓一樓 何ソ寂。一静ナル、柳は岸一壁に似

池は鏡に似たり 白 西朱閣 (一六六)

も新撰村の一節で、神田本卷四と比較すると訓讀は次

の如く全く一致する。

粧一閣・妓一樓・何ソ寂一静なる・柳は舞一膏に
似、池は鏡に似たり（神田本）

同様に、新撰朗詠集の、

(3) 梨園の弟一子 白一髮新(た)なり 椒一房の阿一監

青一蛾 老(い)たり。 (九四二)

は、長恨歌の一節であるが、大東急記念文庫蔵白氏文集寛喜三年（二三三）加點本卷十二では、

梨一園の弟一子、白髮、新(た)なり、椒一房の

阿一監、青一蛾（右傍「城摺本」）老(い)たり。

とあって全く一致する。又、

(4) 江一柳 影 寒(し)新(未)、新一雨の地。塞一鴻 聲

急(訓)(か)なり 霜(に)欲とする天 (四二四)

も、大東急記念文庫蔵白氏文集寛喜三年點の卷十七では、

江一柳 影 寒(し) 新一雨の地、塞一鴻 聲 急

(か)なり 霜(訓)に欲(むとする)天。

とあってこれも訓讀が一致している。

又、次の二首の、

(5) 間一関たる鶯の語は花の底に滑(か)なり 幽一咽た

る泉の流は水(の)下に難(た)ム (六〇一)

(6) 鴛一鴦 瓦冷(や)カニシテ「に(し)て」霜一華 重(も)シ。

舊キ枕 舊キ衾 誰ト一与「と」共ニカ「か」セム (一〇三五)

(5)は琵琶行、(6)は長恨歌の一節で、前引寛喜三年本では、

間一関たる鶯の語は花の底に滑(か)なり、幽一咽

タル「せる」泉の流「泉一流」は水の（右傍「水摺本」）

下に難(た)ム「ナヤマシ」。

鴛一鴦、瓦冷(やかに)して「(左訓)ス」霜一花 重

(し)、舊(キ)枕、故(キ)衾、誰(ト)共(ニ)カ(カ)セム。

とあって、二通りの別訓を併記する語句があるが、その中の一方に全く一致している。

(7) 人(は)威(に)在(り)「而」て衆(に)在(ら)不(す)、我(か)王(は)

「也」万(一)夫(の)「之」防(なり)。器(は)利(に)在(り)て大

〔金〕に在(ら)不、斯は劔は「也」三尺の「之」長なり

は文集卷三十一の「漢高帝斬白蛇賦」の一節で、この句を大東急記念文庫蔵寛喜三年點本では、

人をは威に在(りて)、衆に在(ら)不、我(か)王は

「也」、万夫之防(なり)、器は利に在(りて)、大

に在(ら)不、斯(劔)は「也」三尺之長(なり)

と訓讀している。各々「ママ」の一例ずつが異なる外は一致する。文意からすれば「ママ」の箇所は、それぞれ相手の訓に拠った方が意が通るもので、誤点かと考えられる所である。

(二) 訓讀に小異の存する例(異系統の訓の他在例)

梅澤本の、

(8) 西の叢「西一叢」のヒ一莖は勁(ツヨク)シ而健(ツヨク)シ、

天一竺一寺の前の石の上に(して)見(ミ)シカト「かど

省(オホキ)一(オホキ)向(ムカシ)ユ 東の叢「東一叢」のハ一莖は疎(オホキ)にして且

寒(オホキ)シ。湘一妃の廟の裏の雨の中に(して)看(ミ)シカト「かど

憶(オホキ)一(オホキ)曾(オホキ)フ (五六八)

は、寛喜三年點本では、

西の叢の、ヒ一莖は、勁(ツヨク)へくし(て)而健(ツヨク)へし、天一竺一寺

の前の石の上に(して)見(ミ)シカト省(オホキ)一(オホキ)向(ムカシ)ユの左

「ムカシ」の別訓あり。東の藜の(右傍「叢」摺本)ハ一莖

は「ハ」、疎(オホキ)に(して)且寒(オホキ)し。湘妃の廟の裏の雨

の中に(して)看(ミ)シカト憶(オホキ)一(オホキ)曾(オホキ)フ「曾」の左「ムカシ」の

別訓あり。

とあり、傍線の「健(ツヨク)コハシ(ツヨク)シ」のみ異なる。他

は寛喜三年点にも梅澤本にも別訓を併記した処では、

その一つに一致している。又、梅澤本の、

(9) 尋一陽一江の畔に夜、客を送る、楓一葉(オホキ)萩一花

秋、索(オホキ)一(オホキ)々(オホキ)たり (八二五)

は、琵琶行の発端で、寛喜三年點本では

浔陽の江の頭に夜、客を送る、楓一葉、萩一花

「(別訓)萩花」、秋、索(オホキ)一(オホキ)々(オホキ)たり。

とあり、訓詁としては傍線の一箇所のみ小異を見る。
 寛喜三年点には、別に和訓「オキ(のはな)」をも併記し
 ているが、梅澤本新撰朗詠集の訓は音読の方に合っ
 ている。

大東急記念文庫蔵白氏文集寛喜点は現存二十巻の残
 巻であるから、新撰朗詠集所引の文集の全部を比較す
 ることはできないが、右以外で比較しえたものは次の
 ようである。(参考までに寛永板の訓も挙げる)

(1) 東一船 西一船 (右傍「舫」) 悄として言「イフ」(末)

こと無(し)。唯見る江一心に秋の月の白(ゆる)
 を (九三田)

〔大東急記念文庫蔵寛喜点本〕

東の船(右傍「舟 摺本」) 西の舫、悄として言コト

無(し)。唯見(る)江の心に「ノ」秋の月の白(ゆる)を。

〔寛永板〕

東一船 西一船 悄トシテ言イフコト無シ。唯見ル江ノ

心秋ノ月白ユルコトヲ

(1) 玉一容「(左訓末)玉ノ容」寂一寞と「シ」(末)て涙

欄一干たり 梨一花 一一枝の春 雨を帯(ひ)たり
 (九一九)

〔大東急記念文庫蔵寛喜点本〕

玉の容(左傍「エウ」) 寂一寞と(して)涙(右傍「泪 摺本」)
 欄一干たり、梨一花、一一枝、春、雨を帯(ひ)たり。

〔寛永板〕

玉一容 寂一寞トシテ涙 欄一干たり 梨一花 一
 枝 春 雨ヲ帯ヒタリ

(2) 百一川 有ラ未 廻一流の水、一老「(左訓)一タヒ

老イテハ」終に無「シ」(左訓) 却一少の人 (九四〇)

〔大東急記念文庫蔵寛喜点本〕

百一川に有(ら)未廻一流の水、一老 應(右傍「終
 に 摺本」) 無(し) 却て少キ人「少一人」。

〔寛永板〕

百一川ハ未タ有(ら)未廻一流ノ水 一老老テハ
 終ニ却テ少キ人無シ

(13) 四十六「ナル」(左訓) 時の三一月一盡、春を送て

は争(て)か慇一勲(なら)不ルこと得む (ハ八九)

〔大東急記念文庫蔵寛喜点本〕

四十六(なる)時に三一月盡(き)又、春を送て争て

(か) (て)は「得」字にあり(慇勲(なら)不(る)こと)得

(む)

〔寛永板〕

四一十六ナル時 三一月盡キ又 春ヲ送テ 争

テカ一得^エン 慇^シ勲^キナラ不ルコトヲ

(14) 早蜚 鳴て復、歌ムヌ。残燈 消(え)て又明(ら)か

なり 窓を隔(て)て夜の雨を知(ぬ) 芭蕉先ツ

聲有リ (三〇三)

〔大東急記念文庫蔵寛喜点本〕

早キ蜚 鳴て復、歌(み)キ、残の燈、滅(え)て

又明(ら)か(なり)。窓を隔(て)て夜の雨を知(ぬ)、

芭蕉先 聲有(リ)

〔寛永板〕

早一蜚 鳴テ復 歌ミヌ 残一燈 消テ又明(訓)

ナリ 窓ヲ隔テ夜ノ雨ヲ知ル 芭蕉先ツ聲有

リ

(15) 山一川 函一谷の路、遊一子 塵一上の顔 蕭

一條たる 去一國の意 秋の風、生る 故一閑 (六

三〇)

〔大東急記念文庫蔵寛喜点本〕

山川の函谷ノ(右傍「谷の」)路、塵土の「ノ」遊一

子の「ノ」顔(左訓「オモ」)。蕭條と(し)て國を

去ル意、秋(の)風 生る 故閑に

〔寛永板〕

山一川 函一谷ノ路 遊一子 塵一上ノ顔 蕭一條ト

シテ國ヲ去ル意。秋一風 故閑ニ生ル

(16) 面宮 南内に秋の草多(し) 落一葉 階に汚(ち)

て紅一掃(は)不 (三〇八)

〔大東急記念文庫蔵寛喜点本〕

面一宮の「ノ」、南一内に(右傍「落葉」)秋の草多

一汚

シ落一葉 階ハシに満ちて紅を掃ハラハ不。

〔寛永板〕

西一宮 南一内 秋ノ草 多シ 落一葉 階ニ満チ

テ紅ヒ 掃ハラハ不

(7) 新一豊に樹老(い)て明一月を籠メ、長一生殿

間マウシテ黄一昏に鏤セリ (六八五)

〔大東急記念文庫蔵寛喜点本〕

新一豊の樹は老テ明一月を「ヲ」籠(め)たり

〔タリ〕長一生の殿は暗(う)シテ「て」(右傍、本文

「間」上欄「間 摺本」) 黄一昏に「ニ」鏤セリ

〔寛永板〕

新一豊 樹一老テ明一月ヲ籠メ 長一生一殿

間マフシテ黄一昏ニ鏤セリ

それぞれ傍線の部分の訓讀に小異が存するが、その相違を類別すると次のごとくなる。

(イ) 梅澤本が音読、大東急記念文庫蔵本が訓読

(梅澤本)

東一船

西一船

江一心

玉一容(別訓に和訓もあり)

却一少

三一月一盡

早一蚕

残一燈

去一圓

(ロ) 梅澤本が助詞欠。大東急記念文庫蔵本は助詞を

読添える。

百一川 有ラ未ス

山一川 函一谷の路

遊一子 塵一土の顔カ

西一宮 南一内に

紅一掃(は)不ス

(寛喜点本)

東の船

面の船

江の心

玉の容

却て少キ

三月盡(き)又

早キ蚕

残の燈

圓(を)去ル

百一川に有(ら)未(す) (12)

山川の函谷ノ路 (15)

塵土の遊子の顔 (15)

西一宮の南一内に (16)

紅を掃(は)不(す) (16)

樹老(いて) 樹は老(いて) (17)

生る 故|関 生る 故|関に (15)

長|生、殿 闇ウシテ 長|生の殿は暗(う)シテ (17)

(例外) 梨|花 一|枝の春 梨|花、一|枝、春 (11)

(ハ) 助詞・助動詞等の異同

四十六「ナル」時の 四十六(なる)時に (13)

歌ム又| 歌(み)キ (14)

蕭|一條たる去|國の 蕭|條と(し)て國(を)去 (15)

意 ル意 (15)

新|一豊に樹老て 新|一豊の樹は老て (17)

(二) 対句の上の句の結びの訓法

明月を籠メ 明月を籠(め)たり (17)

以上の類型的な相違は、前項に梅澤本と寛永板本との訓法の相違で見出した関係と通ずる。かつ (10) (12) (13) (15) は大東急記念文庫蔵寛喜点と寛永板本との訓が大同で、梅澤本とは異なる。(11) (14) で寛永板本の訓が梅澤本に合うのは、既述の如く寛永板本の訓が取合せであるた

めである)。これは、文集の訓読においても方針を異にする二系統の訓法が存しており、梅沢本の拠った訓法と寛喜点本の訓法とはそれぞれ異系統のものであつたことが推測される。しかも寛喜点本は、寛永板本の基づいた訓法および山名切の訓法に通ずるものと考えられる。

白氏文集の訓法には、少くとも博士家三家の訓、菅原家訓・大江家訓・藤原家(日野流)訓の三系統があつて、平安時代から固定しており、かつそれぞれに訓読上の特色を持ったものがあることを、筆者は現存新樂府加点資料の訓の分析に拠つて明かにした。(「神田本白氏文集の訓の類別」国語と国文学 昭和38年1月)。

(1) 菅原家訓と藤原家訓との相違

- (イ) 菅原家訓が字音読の語を藤原家訓は和訓に読む。
- (ロ) 菅原家訓が助詞・助動詞のない箇処を、藤原家訓では助詞・助動詞を讀添える。

(ハ) 菅原家訓が形容動詞・断定の「たり」を用いる

所を、藤原家訓は「たり」を用いず、「なり」「す」等を用いる。

(ニ) 菅原家訓が即字的な訓の所を、藤原家訓は意識

する。(例) 涙下ス・垂ル ↓ 涙下・垂ス)

(ホ) 菅原家訓は訓点語的、藤原家訓は和文的で、藤

原家訓には「イト」「ソ、トシテ」「シロシメシケリ」など訓点には用いることの少ない語がある。

(ヘ) 菅原家訓が撓音便や略音形の語を、藤原家訓で

はそれら避けて原形を用いる。(例) 入ムテ ↓ 入ミテ・持タリ ↓ 持テリ・弃タレ ↓ 弃テラレ)

(2) 菅原家訓と大江家訓との相違

(ト) 菅原家訓が字音読の語を、大江家訓は和訓に読

ぜ。

(チ) 菅原家訓が助詞・助動詞を用いない所を、大江

家訓は助詞・助動詞を説添える。

(リ) 菅原家訓では用いない「イト」等の和文に多い語を、大江家訓でも用いる。

(ヌ) 菅原家訓と同じく、大江家訓も形容動詞・断定の助動詞「タリ」を用いる。

(ル) 菅原家訓と同じく、大江家訓も撓音便を用いる

○これによれば、漢文訓読という制約を受けながらも、藤原家訓は、比較的和文的表現が多く、菅原家訓は最も訓点語的表現を持ち、大江家訓はその中間にあることが分る。

○又、黄石公三略古点についても、知恩院蔵本(菅原家の証本を伝えたもの)と群書治要卷四十所収本(藤原敦綱の點本の移點)との比較によって同趣のことを証明するにぞができる。その他貞觀政要(徳久述文庫本・書陵部本・五島美術館本)についても同じく指摘できる。

右の三家訓の相違に徴すれば、梅澤本の訓法は菅原家

の訓法に通う点を示している。大東急記念文庫蔵寛喜
志本のは、藤原家ないしは大江家訓法に通う特徴を持
っている。寛喜点本には、「江本无之」(巻二十四)、
「江本漱今一字无之」(巻二十一)等の大江家本の書
入の所々に存するのもし一証である。

新樂府の三家の訓の類別の論拠とした主要資料は、
書院部蔵時賢書写白氏文集(元亨三年写巻三)である。そ
こでは、墨(菅原家)・朱(藤原家)・黄(大江家)・茶(菅原家別訓)と色分けしていることに基づく。本項初に
全く一致するものとして挙げた「昆明春水満」の(1)の
訓法は、時賢本によると(無注記は墨訓とラコト点を菅原家
訓)。

影 南山を浸シ「テ」(朱)青(く)して、混「湊」タリ
波 西日を沈メテ、紅に(し)て、齋「論」タリ
高(黄) 高(黄)又(朱)

とある。これと比較すると、梅澤本新撰朗詠集の訓法
は朱筆や黄筆の訓には合わず、墨筆とラコト点による

訓詁に合うから菅原家訓に拠っていることが実証でき
るのである。

新撰朗詠集に新樂府から引用した詩句は、右の「昆
明春水満」の外に三首ある。この三首は、神田本の訓
と比較するに、共に少異を持っている。

(18) 梨一花一園の中に冊「シ」きて「(五訓)サタメテ」妃
と為す「(金訓)タリ」。金一鶏一障の下に養(は)れて
兒と為たり 胡旋女 (九三〇)

「神田本文集巻三」
梨一花一園の中に冊「シ」きて妃と作す。金鶏障の下に
養ハレて兒(音)と為

(18)では、傍線の部分が合わない。しかし時賢本による
と、

梨一花一園(の)中ニ冊(音)シ(て)「(左訓)「サタメ
テ」(茶)、「エラムテ」(黄)」妃と作す 金一進一障
の下ニ養レて兒「ト」(黄)為たり
二(茶) 二(黄)

とあって、神田本には無い訓をも持っており、その一

訓たる墨筆とヲコト點による訓へ菅原家訓・「茶」色訓も菅原家別訓に、梅澤本新撰朗詠集の訓が一致する。神田本の訓は諸家の訓の取合せを念むが故に（前掲拙稿参照）。右のようなことも見られるのである。

(19) 太行の「之」路、能く、車を推ク、若し人の心に比フレば是（は）は、夷イカなる途なり 至一峽の「之」水、能く舟を覆へす、若し人の心に比（ふ）レば是（は）は安カナル「なる」流なり 大行路（九八一）

「神田本文集卷三」

大行之路、能ク車を推ク、若（し）人の心に比フレハ「（右訓）モノナラ 左、（左訓）レハ右」是レハ、夷途なり。至一峽之水、能く、舟を覆へス
「（左訓）セトモ」、若シ、人の心に比フレは「全訓」モノナラ、是レハ、安ナル「なること」流（金）なり
も、時賢本では、
大行之路、能く車を推ク「（左訓）クツカヘス（朱）」

、若し人の心に比フレ（は）「（左訓）フルモノナラ」是は夷途なり 至一峽之水、能く舟を覆へす
若し人の心に比レハ「（左訓）ルモノナラ」是は安カナル流なり

と神田本にない訓もあって、梅澤本の訓法は文集の現存訓の一に合い、しかもそれは時賢本に認めれば菅原家訓に基づいていることが分る。（但し、稀に「オタヒカナル」のように朱筆藤原家訓を交えることもあったらしい）

(20) 南一北東一面 家を定（め）不、風一水を郷と為す 船を家とへ石傍「宅」作す 塩商婦（九三三）

「神田本文集卷四」

南北、東面、家を定（め）不、風水を郷と為（す）、船を宅と作セリ「なり」
「大東急記念文庫本嘉禎四年本」
南北 東西ニ家ヲ定メ不 風水ヲ郷ト為シ船ヲ宅ト為リ

の「作す」が合わないが、他は一致する。

白氏文集以外にも、現存する訓点資料によってその訓法を比較できるものがある。まず後漢書逸民伝からの一節がある。

(21) 羌則一_テ天と稱セシカトモ「而」穎一陽の「之」高(き)を屈セ不リキ 武(濁音)美を盡(し)シカトモ「矣」終に孤竹(の)「之」潔(き)一_トを全(く)セリ

(七〇七)

は、書陵部藏後漢書享祿四年(一五三二)点(菊田冊の識語)。

この本は万寿元年・應徳二年・嘉承二年・文永三年などの識語を持つ本の移点である)の第三十三冊龐公に、

是_レ以_テ羌則一_テ天ト稱セシカトモ穎陽之高キヲ屈(セ)不(リ)キ。武美ヲ盡(し)シカトモ「矣」終ニ孤一竹ノ「之」潔(き)コトヲ全(く)セリ

とあって、全く訓法を一致している。

又、本朝文粹卷十三から引いた一節も、次の訓点資

料によって比較することができ。

(22) 雪一盡「キ」(朱)水一解(く)る「之」日、谿一鳥を伴(む)「而」て法一音を傳(つ)へ、月一残(り) 露一結(ほるる)「之」朝、籬一花を折(り)「而」て佛一界に供す (七六七)

は、梅澤彦太郎氏藏本朝文粹正安元年点では、
雪盡キ、水一解_クル「之」日、谿一鳥に付

イテ「而」て妙一音を傳_フへ、月(朝)残_リ、露_ユ結_ル、「之」朝、籬_リ一花を折_テ以て佛_界に供_スセム

とあって、傍線の語に少異があるのみである。

又、文送・西都賦から引いた詩句がある。

(23) 左は函一谷ニ嶠の「之」岨_シキに擬(り)て表_スル(朱)に太一華終一南(の)「之」山を以(こ)す
右は猿_投神_社藏_正安四年(一三〇三)本文送(訓点語と訓点資料14・16・18・21輯)では、
河一涇一滑(の)「之」川を以てす (六四三)

は、猿投神社藏正安四年(一三〇三)本文送(訓点語と訓点

資料14・16・18・21輯)では、

左ニハ「を」^{カム}函一(欠損。「カウ」見也)カシキニ擡リ(て)
(表)スルニ太一華、終一南ノ「之」山(訓)ヲ以(こ)
 ス。右は(欠損。「シヤ」見也)首之險(訓)サカシキヲ
 「を」界(サ)て帯(マ)ラスニ「に」、洪一河、涇一渭之川(訓)
 ヲ以てス

とあって殆ど一致する。句頭の「左ニハ「を」」が異なるのは猿投本が別系統の訓を混じたものである。猿投神社蔵弘安五年(二八三三)本文送では、同箇所を、

左(ミ)を函一谷ニ峭之阻(訓)に擡りて表スルに
 「(右訓)ホカニハ、(左訓)アラハスニ」太一華、
 終一南之山(訓)を以(て)セリ「(左訓)ス」右(リ)は
 覆一斜、隴首之險(訓)シキを界(サ)して「(右訓)へさか」へ
 リ「帯(マ)ラスに洪一河、涇一渭之川(訓)」を以て
 セリ「(右訓)セリ、(別訓)む」

とあって別訓を示している。弘安本の方の訓法は藤原家か大江家の訓法を持っていかと推測する。(八九条家本文送の奥書、濁音符等より考えられる)

次に、遊仙窟からの引用が一例ある。

(24) 可(ア)一憎(ア)の病(ヤ)一鵲(メ)の半(ヨ)一夜(ナ)ニ「に」人を驚(オ)かす。薄(ナ)一
 媚(ナ)キ狂(ウ)一鶏(ケ)の三(ア)一更(メ)に暁(ア)を唱(ナ)フル (二〇二三)

は同箇所を、醍醐寺本遊仙窟康永三年点(一三三四)では、

可(ア)一憎(ニ)ノ「の」病(ウ)一鵲(メ)ノヤモメカラスノ夜(ヨ)半(ナ)二人(ニ)を
 驚(オ)カシ。薄(ナ)一媚(ナ)トナサケナキ狂(キ)一鶏(ケ)ノウカレトリ
 ノ三(ミ)一更(メ)に暁(ア)を唱(ナ)フル?
 ト云コトサ管
 可(ア)一憎(ニ)ノ病(ウ)一鵲(メ)ノヤモメカラスヤ夜(ヨ)半(ナ)二人(ニ)を
 驚(オ)(かし)、薄(ナ)一媚(ナ)トナサケナキ狂(キ)一鶏(ケ)ノウカレト
 リノ三(ミ)一更(メ)ニ暁(ア)を唱(ナ)フル

と訓読する。遊仙窟の現存二訓点本は訓法が大同であるのに比べて、梅澤本新撰朗詠集の訓とは大きな相違がある。その相違の(一)は二訓点本は文送読に従っているのに梅沢本は文送読ではない。(二)「夜半」の訓は二訓点本「ヨナク」で、梅澤本は「ヨナカ」である。

但し、醍醐寺本で左訓に「ヨナカニ」を併記するのに合う。醍醐寺本の訓は、その識語によれば、大江家の訓を伝えたものであるという。ところが左傍に菅原家の訓をも所々併記してある。右の例でいえば「ト云コト菅」がそれである。同じく左傍訓の「ヨナカニ」も、「菅」の注記を脱するが（そういう例は屡々存する。前掲「神田白氏文集の訓の類別」参照）、恐らく菅原家の訓であろう。又、大江家が文選読を訓法の特徴として持っていたことは、清原宣賢述毛詩抄（岩波文庫本）にも、

口彼の崔嵬サイカイに陟ノボりて我が馬、虺隤クワイタイしぬ（巻二63P）
サイタイとやみぬは

。江家にはくわいたいとやみぬとかたちよみにするぞ

口各オノオノ斯の羽ハあり、誦シヨたり。爾ナの子孫シヨクに宣ノし、振ヒ振ヒたり。
とをじ江 とをじ

（巻二69P）
とをじ江

。江家には誦々とをしとよむぞ

。江家には振々とをとなし、二ころよし二義によむぞ

とあることから窺われる。さすれば、遊仙窟所引訓読に大差を有するのは、梅澤本朗詠集が、大江家訓によらず、菅原家訓に基づいたためであろうと思う。

以上のことから、梅澤本新撰朗詠集所引の漢詩句の訓読語は、現存の諸点本の訓法と一致することが判り、その中でも比較しえた限りでは大綱は菅原家訓に拠ったものであることが推測されかつ実証される。又、現存諸点本の訓法と部分的に一致しない例の存するのは比較に用いたその漢籍がその部分に關して異系統の訓のものであるためであると考えられる。

三、梅澤本における別訓の存在

梅澤本新撰朗詠集の漢詩句の加點には次の四通の筆

が見られる。

① 朱筆訓（朱の声点も）とヲコト點（朱）

② 墨訓（墨の声点も）とヲコト點（朱）

③ 墨訓の左傍書入

④ 朱筆の合點（主に墨訓に加う）

① 朱筆訓は百十教箇所へ外に朱声点が四十教箇所用いられており、「遍（ハニホ）砌（ハニ三四）」「方（ハニ五）遇（ハニ六）南（ハニ七）薰（ハニ八）」主（ハニ九）へ三五五（ハニ一〇）「鴉（ハニ一一）」へ声点も朱へ三五〇（ハニ一二）の如く漢字の右傍に存する。朱筆訓はヲコト點と相援けて訓読された筈であるが、①のヲコト點と②のヲコト點との區別は判別し難い。

②の墨訓とヲコト點とが梅澤本の訓読の主要部分である。

①の朱訓と②の墨訓との関係は、二者の重複した二例へ（ハ八五とヒ二九）、および訓法を異にする三例へ（九二〇と五〇三と九九〇）以外は皆相補って訓読するが如くである。即ち、朱訓のある漢字には墨訓を欠き、墨訓のある

漢字には朱訓を欠くのが大部分である。しかも、一漢字を朱墨両筆で訓ずる例も次の如く存する。

穿（ハニ一三） 作（ハニ一四）

縦（ハニ一五） 樂（ハニ一六）

①の朱訓と②の墨訓との先後関係は、朱が先で墨が後である。それは、(一)右のヒ二三・九〇二・ハ六一の例から見ても考えられる如く朱が先に存して、それに墨訓を更に詳しく加筆したらしい。この逆は不自然である。(二)百十教箇所の朱訓は三例へ（五六一・九一九・六一九）を除いては皆、漢字の右傍にあるへ傍訓の初めての加點は右傍にするのが常道である。(三)朱訓と墨訓と重複した「ハ八五」の「履（ハニ一七）」は朱訓の上から墨訓でなぞっている。「一〇〇四」の「湛（ハニ一八）」の音合符も朱の上から墨を加えている。

仮名字体は朱訓の方がやや古く感ぜられるが、恐らくそれは原の本の字体に引かれたものであって、墨訓

と同時代であるうか。墨訓にも所々にやや古い字体がある。墨訓は與書にいう嘉祿二年の定家のものである。少くとも一回以上の転寫を経ている。それは「^フ」
^フ 纤^フッて(ニニニ)↑マとアとの類似「^フ」弄^フソフ(ニニニ)「

の如き機械的な誤寫のあること。(二)第五項に述べる如く、唇内と舌内擦音を大部分區別していながら一例誤用していること(定家本更級日記では全例正しく區別する。後述)、又大部分が定家仮名遣に拠りながら少数の例外のあること、等より考えられる。仮名字体も嘉祿より後と見られる。

原本たる定家書寫本に既に訓點の存していたらうことはその識語に朱筆で「加點訖」とあることで知られる。但しそれが①の朱訓朱ヲコト点だけを指すか、②の墨訓朱ヲコト点もさすのかは一考の要がある。別人が後に墨訓朱點の方を加えたものを転寫した場合も考えうるからである。しかし梅澤本では和歌の仮名遣も墨訓と同じく原型の定家仮名遣に合ひ、その字体は定

家の手に酷似していることから墨訓も定家書寫本に存したものと思われる。

③墨訓には、右傍訓の他に、別に漢字の左傍に墨訓を書入れたものが存する。

(4)字音語に対して左傍別訓が和訓の例へ「^フ」の合點は朱)

忝^フ一^フ名^フを (左訓「名ヲ忝シケナロスルコトヲ」、中央の
 へカウシケナロスルコトヲ

縦線は音合符で字音読を示す。以下同。(へハ六三)

此^フニ^フ一^フタ^フ (左訓「スコシハカリ」)(二〇〇二)
 スコシハカリ

珂^フ (左訓「ミ、カネ」)(四〇三)
 ミ、カネ

一^フ一^フ沖^フ (左訓「ニタロキテ」)(三〇四)
 一、ニ、タ、ロ、キ、テ

色^フ一^フ絲^フを (左訓「色ノイトラ」)(六一二)
 色、ノ、イ、ト、ラ

長^フ一^フ襟^フ (左訓「長キオモ」)(六一九)
 長、キ、オ、モ

三一 傲 (左訓「ミタビメセトモ」)(七一四)

三一 羨 (左訓「ミノヨソフビ」)(四〇〇)

三一 私 (左訓「私(を)オモフ」)(二七九)

三一 語 (左訓「ミタリカハシク語(る)」)(二〇八)

三一 歌 (左訓「高クウタウ」)(一〇八・三三〇)

三一 撞 (左訓「コトナル タネ」)(二一六)

三一 憂 (左訓「モ、ノウレ」)(四六二)

三一 浴 (左訓「カモメヨクス」)(六八七)

三一 香 (左訓「アカツキノカ」)(五一)

三一 老 (左訓「一タヒオイテハ」)(九四〇)

老 (音) (左訓「オキナ」)(九八五)

(ロ) 助詞・助動詞を欠く訓に対して、左傍訓は助詞・助動詞を添える。

豎る (六四八) 去る (七二二)

逝 (六九二) (「インヌ」か) 誕生 (七一六)

(ハ) 左傍訓が他訓と異なるもの。

亮 (五八九)

③ 墨訓の左傍訓と② 右傍墨訓とは仮名字体も墨色も同じである。従って原本で両者に何らかの区別(例えば左傍訓が朱であるような色分とか、左傍訓は別筆であるとか)があったものか、原本で既に同筆であったのか判別は難しい。

③の墨訓左傍訓との朱筆訓とは訓法上共通する。
(イ) 字音語の訓に対して朱筆訓は和訓。

玉一容 (合點も朱) (九一九)

暗^チ春 (五八一)

鶴^チ一^キ喉 (朱訓「鶴^チ」^キ「喉^チ」) (五八五)

(ロ) 助詞・助動詞を欠く訓に対して、朱筆訓は助詞・

助動詞を讀添える。

払^チ一^ス尽 (朱訓「払^チ」^ス「尽^チ」) (五三〇)

幾^カ残^ル (朱訓「残^レ」^ル) (五八九)

④の朱筆の合點は右例でも分る如く、多く③墨訓の左傍訓に加えてある。(左傍訓に合點のないのは合點の打忘れか脱落であろうか) その他、訓法に二通りある際の右傍訓にも稀に加えてある。

(イ) 朱合點付の訓が和訓で、別訓は字音であるもの。

拳^チ一^フ帆 (往^チ一^ス反) (六六一)

轉^チ一^ス棹 (東^チ一^ス西) (六六一)

(ロ) 朱合點付の訓が助詞・助動詞を讀添えるもの。

五^チ顧^ル (「かへりみる」に対して「かへりみし」) (六四五)

身^ハ埋^セ (「うづむ」に対して「ウツモレヌ」) (九一二)

挑^チ一^ス尽 (「つくす」に対して「ツクセル」) (三六五)

以上によると、梅澤本に二訓を併記する場合のうち、①朱訓と②墨訓左傍訓(多く合點付)と④合點付の右傍墨訓との三者は、それぞれ他の一訓に対して相共通する訓法を持っている。しかもそれは、寛永板本の基づいた訓法と相通する。即ち、梅澤本新撰朗詠集の漢詩句の訓読はA系統とB系統とが見られ、A系統は②墨訓と朱ヲコト點でこれが全巻の大部分を占める。B系統は部分的又は或種の詩句に偏りの朱訓(朱點)・③墨左傍訓・④朱合點付訓で示されるものである。前項において他漢籍點本と比較して、菅原家訓の特徴を持つと見たのはA系統の用例に拠って実証した結果に基づいたものである。別訓であるB系統の訓法は、その特徴から見て、山名切の訓法に通じ、藤原家或いは大江家の訓法を示している。(前項で部分的に不一致訓

きぬにゝたれば

泉式部

(類従本和泉式部集、春、一見し)

2. 栗山善四郎氏蔵

夏夜

日^ヒ長ク夜^ヨ短カウシテ、
漏^ヌノ遅^{オソ}明^{アカ}ニ 郭^{カク}公ヲ聴ク
菅家万葉集

梅澤本一 嬾^{ヲシ}へくシテ。興^{オモ}クレは。遅^{オソ}明^{アカ}コロラビニ
寛永板一 晨^{アサ}ニ興^{オモ}フルニ傾^カウシ。遅^{オソ}明^{アカ}ニ
アケルコホヒニ

月^{ツキ}蘋^{ヒナ}藻^モニ沈^{シヅ}ム、銀^{ギン}鈎^カノ影^{カゲ}、風^{カゼ}松^{マツ}。杉^{サギ}ニ觸^フル。
玉^{タマ}ノ軫^コノ聲^{コエ} 池樹消暑
田忠臣

(寛永板一 觸^フシテ)

水^{ミヅ}煙^{ケリ}半^ナ濕^シフテ、綺^キ羅^ラ。冷^{ヒヤ}シ 山^{ヤマ}月^{ツキ}。初^{ハジ}昇^{ノボ}テ樓^{ロウ}閣^{カク}

明^{アカ}カナリ 夏夜^{ナツヨ}池^{イケ}菴^{アン}即^{トキ}事^{コト}
儀^ノ同^{トウ}三^{サン}司^シ

(梅澤本一 池^{イケ}亭^{テイ}即^{トキ}事^{コト})
寛永板一 池^{イケ}臺^{ダイ}即^{トキ}事^{コト})

なつのよはうらしまのこかはこなれやはかなくあけ
てくやしかるらん 養

夏の夜はまたよぬながらあけにけりくものいつこに
月^{ツキ}かくるらん 深^コ養^{ヤウ}父^フ

梅澤本一 曙^{トキ}ぬるを。残^ノ覽^{ガン}
寛永板一 あけぬるを。やとるらん

3. 某氏蔵

立秋

涼^{スズ}風^{カゼ}、急^イ子^コニ扇^{アヒ}テ物^{モノ}先^マツ哀^{アハ}シ 是^{コト}レハ秋^{アキ}ノ氣^キノ早^{ハヤ}
ク来^キルカ為^タナル應^{オウ}シ

梅澤本一 哀^{アハ}シフ
寛永板一 哀^{アハ}シム

壁^ヒ菴^{アン} 家^イ々^々音^ネ始^{ハジ}テ乱^マル。葢^カ。芽^メ (右^{ミドリ}傍^{ナド}) 「觸^フ」

處々^{トコロトコロ} 菜^ナ 初メテ開ク 菅原万葉

(寛永板―葦蘭^{アシラン} 菜^ナ)

宵ハ深ケヌ月^{ツキ}一桂^{ケイ}ノ孤^コ論^{ロン}ノ影^{カゲ} 秋^{アキ}ハ浅シ風^{カゼ}一槐^{ケイ}
ノ一^{ヒト}菜^ナノ聲^{コエ} 立秋作 都庄中

(梅澤本―宵ハ深ケテは。秋ハ浅クシテは
寛永板―夜ハ深ケヌ。秋ハ浅シ)

にはかにもかぜのす、しくなりぬるか秋たつひとは
むへもいひけり 俊採集

(寛永板―読人不知)

河風のす、しくもあるかうちよする浪と、もにや秋
はたつ覧 貴之

4. 峰島茂兵衛氏蔵

(晴) (標題欠)

雲^{クモ}一際^{ソバ} 日光^{ニチカ}、万井^{マンヰ}ニ分シ、煙^ケ一消^{キヤウ}工^{コウ}テは(マニハ)馬^{ウマ}ヲ
コト忌^{コトシ} 山^{ヤマ}ノ色^{イロ} 千^チ峯^{ソウ}ヲ露^{ツル}(す)。元

(梅澤本―雲の間の(古傍「際」)。日光(音読)は
寛永板―雲ノ際ノ。日ノ光ハ。煙リ消テノ。山
ノ色ハ。)

天^{アメ}一^{ヒト}台^{ダイ}嶺^{リョウ}ノ前^{マエ}ニ、四十五尺ノ「之」泉^{イハレ}、布^フヲ曝^{ヒラ}ス、
洛^{ラク}。陽^{ヨウ}一^{ヒト}城^{シヨウ}ノ外^{ソト}ニ、三十六峯^{ソウ}。(「ホ」入声、「ウ」ノ) 山蹟秋望多 齊名

(寛永板―天一台ノ嶺ノ。布ヲ曝シ。)

野^ノ一^{ヒト}鷓^シ。一^{ヒト}沖^シ (「ヒ」井「リ」ともに上声点あり) 晴^{ハレ}ノ後^{ノチ}
ニ失^{ウツ}セヌ。寒^{サムイ}一^{ヒト}鴻^{コウ}。数^ス一^{ヒト}點^{テン}、望^{ノゾミ}ノ中^{ナカ}ニ(「ニ」墨のヲコ
ト点もあり) 銷^{キヤウ}エヌ。 高天澄遠色 村上御一

(梅澤本―野一鷓の一沖は「(五、合点)一タヒ沖
井テ」。澄色。)

(寛永板―野一鷓一タヒ沖イッテ、失セ。数^ス一^{ヒト}點^{テン}ヲ

分ツ應シ。一。學ノ鶴(訓)ノ毛羽。計ヘムト欲フ。數一
行ノ雁(訓)ノ弟兄。天秋无片雲。保胤

梅澤本 — 計ヘムト「むと」欲。
寛永板 — 計ヘムト欲。
無。無。

金一風。吹キ拂フテ(「こ」は墨のヲコト点) 青。山極マヌ、
銀一水。洗ヒ除イテ(「こ」の墨のヲコト点もあり) 碧。兼吞メ
リ 同題
以言

梅澤本 — 洗一除ヒ(「余」て。
寛永板 — 洗ヒ除イテ

たなはたのあふきの風にきりはれてそらすみわたる
かさゝきのはし 元輔

暁

思一婦ヲ「於」深一窓ニ(「こ」のヲコト点もあり) 愁ヘシ

ムルは(「は」墨のヲコト点。別訓「レハ」もあり) 輕紗漸ク
ニ白シ、幽人を(「を」墨のヲコト点)「於」古屋に(「こ」
墨のヲコト点)「卧」(本文)眠ラシメテハ(右傍)、暗一際。纒
二明ケヌ。 暁賦 謝觀

梅澤本 — 愁(へ)シムレハ。眠(ら)シムレ(は)。
明(か)なり。
寛永板 — 愁ヘシムレハ。漸ク。眠フラシムレハ。
明カナリ。

上ー陽一宮ノ裏ノ曉鐘ノ後(訓)、天一津橋ノ頭、残
月ノ前(訓)・ 暁上天津橋

梅澤本 — 頭の
寛永板 — 暁ノ鐘・頭の。

5. (ヲコト点無し)

懷舊

昔尼父之在陳兮 有歸與之歎音 鐘儀幽而芝奏 莊

顯而越吟 登樓賦 王仲宣

(梅澤本—奏吟)

昔君烏紗禮贈我白頭翁 帽今頂上在君 (欠)

つねよりも又ぬれそゑした本かな むかしをか
ておちしなみに 赤染衛門

右によって明らかなきごとく、山名切の訓読と梅澤本の訓読とは、傍線の部分のごとく、所々訓法を異にしている。類別すると次のごとくなるう。

(1) 梅澤本に二訓併記された一訓が山名切に一致

梅澤本

○ 穩 烏混反 なり

オタヒカなり(合点脱カ)

○ 一沖

*一タヒ井テ(未合点訓)

山名切

穩ヒ(ハ)ナリ

一ヒ沖井リ

梅澤本に字音読と和訓読とが存するうち、山名切の訓は和訓読の方に一致する。

(2) 梅澤本の字音訓を山名切では和訓に読む。

○ 日一光は

日ヒ光ヒ

(3) 梅澤本に助詞・助動詞を欠く所を、山名切は助詞・助動詞を讀添える。

○ 宵 深フケテは

宵ヨハ深フケテハ

○ 秋 浅クシテ

秋アキハ浅カシテ

○ 明 (ハ) なり

明アケケテハ

(反対例、但し山名切は「の」を補読すべきものか)

△ 野一鷓の

野ノ一鷓トの

△ 雲の間の(右傍「際」)

雲クモ一際ヘ

(4) 対句の上の句の結びを、梅澤本は終止形、山名切は中止形とする。

○ 製キす

製キシテ

(5) 讀添の助動詞の相違。

。愁(へ)シムレは

。眠(ら)シムレ(は)

(6) 傍訓の相違

。哀シフ

。咲ヒ一 致サシム伶一 倫ク

。嬾(く)シて晨に興クレは

。遅一 明に

。洗(ひ)除(て) (「ラヒ」朱)

。計(へ)ムト「むと」欲

愁へシムルは「レハ」

眠ラシメテハ

哀シ

伶一 倫ラ咲ミ致セシム

嬾ク晨ニ興ク

遅一 明ニ

洗ヒ除イテ

計(へ)ムト欲フ

の別訓と同じ系統であることは次の點でも考えられる。
(イ) 山名切が、梅澤本のの朱訓に合う。

(梅澤本)

(山名切)

。金一風吹(き)拂(つ)て

青一山極(ん)「ヌ」(朱) 銀

水洗(は) 除(て) 碧一海

吞「メリ」(朱) (「ハラヒ」は

「アラヒ」の誤寫で「洗」の付訓

であらう) (五田六)

。暗一 際。(入声点朱)

(五五〇)

暗一 際。

(ロ) 山名切が、梅澤本の朱重合點付の訓に一致する。

。一 一 冲 (合点朱)

(五田二)

一 一 冲。リ

。雲の間 (右傍に「際」とあ

る。合点朱) (五田二)

雲一 際

比較すべき量が少ないので右の例数も多くは出せないが、右の如くなる。この訓法の相違は、前項に挙げた相違に通ずる。即ち上段の梅澤本がA系統の訓法の特徴を示しているのに対して、山名切のはB系統の特徴を示している。(6)の傍訓の相違においても、梅澤本の「カナシブ」「嬾くシて」「むとす」の訓は訓点語の特徴を担う語遣であって、従って最も訓点的な菅原家の訓法と見るのに抵觸しない。山名切が梅澤本B系統

山名切の訓點は「永久四年（二二六）孟冬二日扶老眼
點了惠叟基俊」と自署のある多賀切（倭漢朗詠集）に
従つて作者基俊の加點とされている。一方、梅澤本の
奥書には、「嘉祿二年三月十四日戸部尚書藤（定家）」
の次の行に朱筆で「加點訖」とあり更にその次の行に
「此點前左金吾（右侍「此集撰者」）基（基俊）被授
于先人之説也」とある。山名切の訓讀と梅澤本の訓讀
とに一致するものがあるのは、共に同一人基俊の點法
を伝えたものとして考えられることである。しかるに
山名切に一致する梅澤本の訓は、すべての訓ではなく
別訓と見られたB系統のものであつて、A系統の訓に
は合わない。これは次の如く解釋される。即ち、梅澤
本の原本の訓點は少くとも二次の加點があつて、第一
次には、朱筆訓および朱筆合點付のB系統の訓が加え
られ、次いで第二次にA系統の②墨訓が加えられた。
梅澤本の奥書にいう、朱筆の「加點訖」および「此點
は基俊が先人（俊成）に授けた説」というのは第一次のB

系統の訓をのみ指すのであろう。その後第二次として
全卷に詳細なA系統の墨訓が加えられたのであろう。

A系統の墨訓加點が定家の手になるものか、別人の
手になるものかは又別問題であらう。私は恐らく定家
の加點であらうと思ふ。それは、表記上、梅澤本が持
つ一二の誤を転寫の際の誤寫と考えるならば、(1)字音
語および国語音便、唇内捲音と舌内捲音とを正しく区別
していること、(2)原型定家仮名遣に一致すること(3)
(4)共に次項参照)は定家の如き碩学にして能く為す所
であると思ふからである。(唇内と舌内の捲音の別は
鎌倉時代には乱れていることが他の點本から判明する。
しかるに定家書寫本系の例えば御物本更級日記では一例
の例外もなく正しく区別されている)。

梅澤本の加點を右の如く考えると、関連して説くべ
き問題がある。(1)別訓と見られたB系統訓が、第一次
加點とすると、それは新撰朗詠集の漢詩句の全部に加
點されたものではなかつた。B系統訓加點の詩句は作

者でいえば以言・時棟・江澄兼など大江家の人の作詩、大江維時編「千載佳句」所引のもの、漢籍でも白氏文集・文選・本朝文粹など（大江家加點の証あり）が目立っている。倭漢朗詠集においても平安時代の古寫本には訓点のないものあり、加點があつても全詩句には存しない（古筆切などにある訓点には鎌倉時代・室町時代の訓点（認められる）ことから、基俊の點を伝えたとする）B系統の訓が右の事情であることは考えられることである。（二）A系統の訓は前項までに明かにした如く菅原家の訓法と見られる。第二次にA系統の加點をしたのは、思うに、B系統の訓が詳細でないのを補つて、詳細な墨訓を加點したものであるか。それは又、博士家点法史上、鎌倉時代には菅原家の訓が大江家・藤原家訓よりも勢力を持つに至った当時の趨勢と深い関係があると考える。この趨勢は現存資料で証明できる。例えば白氏文集の訓において然りであるし、倭漢朗詠集についても平安時代の古寫本に加えられて

いる訓点は大江家・藤原家訓が主であるのに、鎌倉時代になると菅原家訓が多くなるのである。これに拠つて更に考えるに、梅澤本の奥書で「此點は基俊の説」であるとして朱筆で「加點訖」をさしてことさらに明記したのは、それと区別されるべき菅原家訓を意識していたからの所為かもしれないのである。さすれば第一次・第二次というのは必ずしも長時間の隔りをもつたものでなく、殆ど時を接してなされたかもしれない。しかしの朱筆が第一次で先であること。A系統とB系統とを区別しようとしていることは梅澤本からも明らかに知ることができるのである。（三）山名切の訓法が菅原家訓とは異つたものであることは既述の如くであるが、それは濁音表記符号からも指摘できる。字音記の濁音を示すのに、梅澤本では全部の例が「^{oo}」を以てする。

青一^{oo} 蓑一^{oo} 書^{oo} 扇 上一下^{oo}
 腕一^{oo} 夢^{oo} 嚴^{oo} 師^{oo}

然るに山名切では全例が「ㄱ」「ㅇ」を以て示している。

(以下音見の全例である)

善馬 銀鈎 松杉 玉稜 山月

望 紫 月桂 万井 銀水

幽人 残月

右の中には清音が連濁になったものもあるが、他は本末濁音の字音であって、「ㄱ」「ㅇ」ともに濁音符であることは疑ない。このような使い分けは、筆者の調査では博士家点では、

「ㅇ」を使用 — 菅原家・清原家

「ㅇ」を使用 — 大江家・藤原家

となる。時賢本白氏文集でも、

「ㅇ」(墨筆) — 菅原家訓。 「ㅇ」(朱・黄筆) — 大江

・藤原家訓

と例外なく使い分けている(前掲掲掲「神田本白氏文集の訓の種類」)

次に、山名切にはヲコト點の残存がある。山名切の訓は全体に墨筆訓で示されているが、所々不統一にヲコト點を墨筆で加えた箇所がある。峰島氏蔵分だけであるが、

煙 消エては(晴) 吹拂フて(晴)

幽人。を「於」古屋。に(暁) 愁(シムル)は(暁)

の如く仮名訓と相補って読まれたり、又

望ノ中ニ「に」(晴) 洗除「て」(晴)

深窓ニ「に」(暁)

の如く仮名訓と重複した例もある。ヲコト點は左下(テ)

・左上(ニ)・右上(ヲ)・右下(ハ)となり博士家點と推

測される。類似の例は、仏典で同年移點の興福寺蔵大

慈恩寺三藏法師伝の永久四年點にも存する(永久點は

墨訓に改めているが原點は喜多院點だったらしい。築

島裕博士「興福寺蔵大慈恩寺三藏法師伝古点」東大教

養学部人文科学科紀要九輯一〇八ページ)から、この

よくなヲコト點が残存したのは、この墨訓だけの訓點を持つ山名切の漢詩句の典拠となつた本に博士家のヲコト點が施されており、それを移點して仮名遣に改められる際に原本のヲコト點の一部が偶々残存したものと想像される。さすれば山名切の加點には、加點者の創案というよりも典拠となつた漢詩句の訓法を忠実に移したものが存すると見られる。その際、加點者の拠つた訓法は、もし典拠漢詩句に二三系統の訓法があつたなら、その中の大江家か或いは藤原家の訓法であつたと考えられるのである。

五、國語史料としての梅澤本の訓読語

(1) 定家仮名遣の使用

梅澤本の訓読語の仮名遣は、加點が鎌倉時代であるから誤用例の存することは無論であるが、正用誤用ともに定家仮名遣と殆ど一致する。

東京大学国語研究室蔵下官集(語学叢書文永本も本稿に肉しては異同なし)に挙げられた例で、梅澤本に該当するものは次の如くである。(△印は共に歴史的仮名遣に合わないもの)

(梅澤本)

△處ヲクコトハ

襟オモヒ・思ヒ

老オイテハ

懐・憶曾オモフ

△種ウヘシ

不勝タヘ

洋キエテ・銷エヌ・消キエ

見ミエ不

得エ

越コエ

△をト

△おのへ

(下官集)

をくつゆ

てにをハの詞のをの守

おもひ

おひぬれハ

又常幸也

おもふ

うへをく

草木を裁也

不堪たへす

消きえ

みえ

えやハいふきの

越コエ

をとハ山

おのへのまつ

最後の二例は和歌の例で、歴史的仮名遣に誤用した例を参考に挙げたものである。下官集の例語が少ないので右がその全例であるが、下官集の仮名遣に全く一致している。人丸紋抄（国語学大系本）は右の下官集より増補語があり、梅澤本で該当するのは、右以外には

（梅澤本）

迷ヒ 迷フ

（人丸紋抄）

まとひ

があるが、これも一致しているのである。次に弘安七年本下官集（国語学大系本）は更に増補語が認められるが、これに梅澤本で該当する語は、上掲以外には

（梅澤本）

隋・下 オツ、オチテ

（弘安本下官集）

おつる

起・興 オウ・オクレハ

おくる・おきゐて

誨 ラシヘ

をしへ

△ 愚 ラロカニシテ

をろか

◎ 重 カラル

かほる

が挙げられる。上掲例を加えると、弘安本の仮名遣に

大部分が一致することになるが、最後の一例梅澤本の「カラル」が、弘安本下官集では「かほる」で一致しない。

定家卿仮名遣（国語学大系本）によると、両者該当語は上掲の外に更に次の例が増える。

、（梅澤本）

多 オホシ

（定家卿仮名遣）

おほく多

△ 自 ヲノツ（から）（ハ例）

をのつから自

課 オホセテ

おほせ仰

省・省向 オボユ

おぼり覚

顔 オモテ（二例）

水のおも 水面

酔 ヘリ・ヘル

ゑひて酔

決 トホル

とほる融

◎ 迷 ヒ

まとぬ迷

◎ 掉 サオサイテ

さほ竿

上掲例を加えると、正誤用例ともに大部分が一致する。但し最後の「迷ヒ」と「まとぬ」、「サオサイテ」と

の該当語で前掲以外の例を挙げると、

(梅澤本)

(仮名文字遣)

◎ 競キホフ

きをひむまきおふの時はお也

◎ 嬭タフメては

たはむ 撓×

◎ 揺フルフ

ころもふるう振×

老オキナ

おきな 叟公翁

穩オタヒカナリ

おたしう 穩

△ 重ヲモシ (三例)

をもし 輕重 おもミの時へお也

昌ヲカシテ

さきのよのをかし×

△ 青ヲオキ日

あおし あとし 青蒼碧

の如くで梅澤本と一致しない例が特に「ほ」「わ」「ふ」などに増えてくる。

要するに、梅澤本の仮名遣は、定家仮名遣に拠って
いること、少数の一致しない例があるのは、(1)転寫の
際の誤或は改変も考えられるが、(2)むしろ所謂定家仮
名遣が増補されて行く際に原型から離れたためであっ
て、梅澤本の方が原型に近いものであることが窺わ
れるものである。

参考までに梅澤本書寫以後の仮名文字遣へ東大國語
研究室蔵本。國語学大系本に拠った例は×印を付した)

「さほ」が不一致である。「まとぬ」の方は人丸秘抄
には「まとひ」とあって梅澤本と一致するから、定家
卿仮名遣の誤であろう。御物本更級日記も「まとひ」
である。弘安本下官集の「かほる」は御物本更級日記
も二例とも「かほる」であるから、梅澤本の「カラル」
は歴史的仮名遣に転寫の際に改めた可能性もある。し
かし定家卿仮名遣「さほ」と梅澤本「サオサイテ」の
如く合わない例も加わるのは、「まとぬ」の如く或い
は定家卿仮名遣の方の増補部分に対して梅澤本が却っ
て反対に定家所用仮名遣の原形を反映しているためか
もしれない。へ「サヲ」は觀智本名義抄には「檄・擗」
などに「サヲ(平平)」とあるから梅澤本新撰朗詠で
「サオ」とするのは彼の規範に矛盾しない。項目とし
ても「ほ」は定家仮名遣の原型にはなく増補部分と
見られるものである。

れる。

因みに、山名切の仮名遣は次の如く大部分が正しく

咲^ミ 聲^ミ 聲^ミ 音^ユ 寂^ス 消^ミ
銷^ミ 前^ヘ 計^カ 欲^ミ 洗^ミ 愁^ミ

誤用例は、語頭のオ・ヲ、ハ行転呼音に各一例である。

穩^ヨヒ(ハカ)ナリ

冲^キリ

右の用法は当時としては普通のものである。右の「ヲ
タヒカリ」は、梅澤本では「オ」を用いている。観智
院本名義抄には「穩ヲ(平)タ(平濁)ヒ(上)カ(平)ナ
リ」とあって定家の「オ」採用の規準に合ひ、又仮名
文字遣に「穩おたしう」とあるのに一致している。

次に、梅澤本新撰明詠集は音韻史の資料として幾つか
を提供している。

(2) 「方」の字音仮名遣

河深^チ(く)シては是(れ)を疑(ふ)、仙^ホ一方^カの雪か(と)

境^ホヒは方^ホ一術を傳(へ)て長(く)雪を看る

「方」の字音仮名遣については、池上禎造氏「方字の
合音用法」(島田教授古稀記念国文学論集)・福島邦
道氏「四方なる石」(国語学46輯)に詳述されている。
梅澤本の例もそれに加わるものであるが、後者に紹介
された。同じく、御物本更級日記に、
えもいはず大きなる石のよほう(四方)なる中に
とあるのに思い併される。

(3) 唇内撥音と舌内撥音

三内撥音のうち、唇内は「ム」で表記し、

法音 粧^ム 粧^ム 嚴^ム 慘^ム 穢^ム 白^ム 砧^ム
砧^ム 冷^ム 忝^ム 駑^ム 念^ム

舌内撥音は「ン」で表記する。

長^ン 筭^ン 惟^ン 聲^ン 妍^ン 詞^ン 軒^ン 岨^ン 亭^ン 真^ン 如^ン 水^ン
剪^ン 刀^ン 松^ン 一^ン 堀^ン 暖^ン 雨^ン 忍^ン 辱^ン 輻^ン 輪^ン 林^ン 密^ン
聯^ン 綿^ン タリ 論^ン 滄^ン 淪^ン タリ 駑^ン 念^ン 穩^ン 鳥^ン 渡^ン 反^ン

の如くで区別が存する。ただ一列、唇内 *m* を「ン」で表記した「劔ケン戟ケキ」がある。

和語の拗音便にも、二種の仮名「ム」「ン」の表記の区別が見られる。

A. (イ) 栖ムシ心 栖ムテ 蓋ムテ 歌ムヌ

息ムヌ 偷ムテ 履ム(巻)テ 笑ムテ

好コトムナキ(コトモナクもあり) 苦ネムコロ

(例外 痛ンテ)

(ロ) 頭カウヘ

B. 廻ン(なむ) 奈何(イカ)

(助動詞) 得ムヤ 返ラムヤ 白カラム

為ム 幸セム 領セム 栖マシムム

促ケム(イカ) ことを 惑ヒナムト 充テム

悵然タラム 怕ヲチムヤ 羨ハムヤ

A はマ行から転音したもので、B はナ行・ラ行から転音した拗音である。この使い分けは、字音語における唇内拗音と舌内拗音との使い分けに見合せられる。御

物本更級日記でも例外なく区別されている。

(a) えむ(艶) こむしやう(紺青) ねむず(念)

八例

(b) かむさび(神) ねむころに 二例 ひむかし

(東)

Cf. いはむ(助動詞はすべて「む」)

(d) いん(印) えん(縁) 二例 ちうけん(中

向) けんそう(顕証) しをん(紫苑) と

うしん(等身) ちくせん(筑前) たいめん

(対面) ひかん(彼岸) ひんなし(便)

ふたん経(不断) らいねん(来年) ろんな

し(論)

Cf. あんなる あんへい(二の種の音便は皆「ん」)

拗音の二種の表記の区別は平安時代には原則として存した(山名切でも区別している)が、鎌倉初期から中期にかけて混用が自立して来る。例えば、宗性上人春華秋月抄第五延應元年(三三九)點では允護尊を「ム」に誤る例多く、古今

目錄抄(唐仁一寛元頃三三ハ一也)も「ム」の交角が多い。又、観智院本作
 文法では「ン」角角になっている。定家の書寫本に区別が存
 するのは、定家、字識に基づくものであるう。さすれ
 ば、梅澤本の区別も定家の所為に依る結果であろうと考
 えられる。むしろ、梅澤本の例外「劔戟」「痛ンテ」
 は定家の寫を更に転寫する際の誤であると考えられる。

(4) 拗音の表記(へ付、類音字表記)

(イ) 合拗音

混^{マツク} 濛^{マツク} 漆^{マツク} たり 畫^{マツク} 扇^{マツク} 惟^{マツク} 聲^{マツク}
 百^{マツク} 卉^{マツク}

(ロ) 開拗音

羌^{キョウ} 兎^{キョウ} 苦^ク 行^{キョウ} 破^ハ 却^{キョク} 入^{キョク} 控^{コウ} 馭^{キョ} 岐^キ 疑^ギ
 激^{キョク} 謝^{シャ} セリ 妓^キ 鞠^{キョク} 生^{シヨウ} 誕^{タン} 一^{イツ} 生^{シヨウ} 迴^{クワイ} 翔^{キョウ} 菜^{サイ} 莢^{キョウ}
 真^{シン} 如^{ニョ} 一^{イツ} 箸^{シュ} 無^ム 明^{メイ}
 一^{イツ} 箸^{シュ} 張^{チヤウ} 慮^{リョ} 反^{ハン}

類音字表記の一例外はワ行・ヤ行の仮名表記になっ
 ている。御物本更級日記では、大部分が

源氏 京 丈六 経よみ 靈山 屏風
 命婦 法華經 侍從 中將 勅使
 のように漢字で表記され、稀に、

木^キ ち^チ ャ^ャ う^ウ (へ 几帳) すい^{スイ} し^シ ャ^ャ う^ウ (へ 水晶)

の仮名表記が存する程度である。平仮名文と訓点の片
 仮名表記とは、表記面にも相違が存する(拙稿「平安時代
 の平仮名文の表記様式」語の漢字表記について「国語学」44、45輯)が、訓
 点でも古くは拗音表記には漢字表記が一般であり、拗
 音の中でも合拗音の方が遅くまで漢字表記を保ってい
 る。例えば白氏文集の諸本で見ると、

神田本 (天永四年 一一三點)	訓点	本文の漢字
	本	
	叶女	叶女
	混濛	混濛
	馨裏	馨裏
音將	存卹	存卹
音出	鏗鏘	鏗鏘
音昌	永徽	永徽
クキ	誑誕	誑誕
クキヤウ		
(保延六年の御事)		

時賢本 (元亨四年 一三二四點)		クフウ	音昌 (宋)	音出		クキ	キヤウ
天理本 (永仁元年 一二九三點)	クワン	クフウ	シヤウ	スキツ	シヤウ	クキ	
親王院本 (鎌倉中期點)	クワン		シヤウ	シユツ	シヤウ	キ	クイヤウ
猿投神社本 (貞治二年 一一三六三點)	クワン		シヤウ	スキツ	シヤウ	クキ	クキヤウ
伝実隆書寫本	クハン			シユツ			
大東急記念文庫本 (江戸時代補寫)	クハン	クフウ					

のこく、神田本では、仮名表記もあるが全般に漢字表記が多い。鎌倉時代点本になると、へ時賢本のようにその伝本の性質上古体を残すものも交えるが一般に仮名表記になってくる。天理本永仁点では仮名表記

中心である。

因みに梅澤本に見える、拗音以外の字音語の類音字表記は次のようである。

- 總 烏滯反 琴榻 タフ音塔 梟 テウ音榻々
- 緋 音非 滯。ヘキ 併ヘイ 毗名反

撥音・入声音・二重母音・一音節語に見られる。

(5) 入声音の表記

遏。カツす 戎一羯。カツ

舌内入声は右二例で、「ツ」で表記する。山名切では喉内入声に

壁。(入声輕点アリ) 葎。(上声濁点アリ)

があつて、入声音を無表記にしている。「クキョウ」は連濁の例である。(但し、梅澤本でも和語の促音便は無表記である。「高弟ナシ」「沖ヒキテ」「過ヨキシ」の如くである)

(6) 連濁

(イ) 夢想ムソウソウ

(ロ) 万一頃 誦一生ソウシヤウ

(ハ) 三一危 嚴飾ゲンシキ

梅澤本では既述のように濁音符があるから、それによつて字音語の清濁が判明する。特に中世語の特色の一とされる連濁の例が拾える。(イ)のように喉内撥音の次に起る外に (ロ)舌内撥音や (ハ)唇内撥音の後にも生じている。山名切にも、前掲の外に、

松杉マツシラ

がある。反対に現代連濁に発音する語が、当時連濁でないものがある。

青山アヲヤマ 東西

以上、訓點の表記から梅澤本を見ると、原本の忠実な寫しであることは知られる(ヘア↑マの如き誤寫が二三あるに過ぎない)が、その轉寫は、所謂定家仮名遣

の増補過程を示す諸本と比較すると、文永本下官集・人丸秘抄の原型を保っており、弘安本下官集(但し「さほしは存疑」・定家御仮名遣の「ほ」の増補部分の影響を表っていないこと、入声音の表記(和語には未だ無表記)から考えて、光廣が「此本二条家為道(永仁七年二十九歳没)朝臣真蹟也」と極めた。その時期を去ること遠からざる頃と見られる。

六、梅澤本の訓読語について

— 訓下し文のために —

訓點資料の訓下し文は、原漢文に加えられた仮名とヲコト点とに従つて為されるが、訓點の実用性からして、私に語尾や助字などを補つて訓読する場合が生ずる。梅澤本はヲコト点も仮名も詳細であるにも拘らず、やはり処々推読の必要が存する。推読のためには、その点本内における訓読の奥態を知ると共に、広く訓読

史の知識も必要となる。訓下し文作成の前提として、梅澤本の訓読について、最後に觸れておく。(全例については解讀文付載の語彙索引を参照されたい)。

(一) 助字の訓法

(1) 再読字

「應」は今日の漢文訓読では「マサニ……スベシ」と訓ずるが、古点本では単に「ベシ」のみであるのが一般である。桂庵和尚家法倭点の返読字中にも収められていないし、再読字になるべき要件を持っていない。(拙稿「漢文訓読史上の一問題―再読字の成立について―」国語学(輯) 梅澤本でもすべて「マサニ」の訓を持たないので、古法に従って「ベシ」とのみ訓じた。

水近(く)シては薰す應シ (二四七)

君を見て我を問フ應クハ言フことを為ヨ (五七七)

「須」「宜」は各々再読している。

栄一華は外一物、終に須ク語るハ須シ (九八四)

木一雁一一篇、須(采) (く)記一取るハ須シ(ベシ) (采) (九八三)

門一賓の拾一謁は宜シフ夏を期すハ宜シ (二七) 「将」も再読する。

寸一陰の景の裏に、将に際を過ぐる「之」駒を窺

(は)むとハ将シ「す」(一〇四三)

「未」も「イマダ……ス」の再読訓がある。

良一人未夕婦ラハ未シ (四四九)

他の十例には「未」とヲコト点「す」のみ加点、残りの六例は無点である。「未」には「不」と意味が通う用法があるが平安中期以降、博士家訓法としては、他の再読字と同じ要件で二度訓みをする例にならって、一様に「いまだ」を補った。「非」が「不」と同意を持ちながら平安中期以降は一般には一様に「ニアラズ」という訓法を持った傾向と等しい。

(2) 結びに一定の呼応を持つ助字

「況」は結びにヲヤが来る。

峽裏に猿一鳴(き)して悲(しみ)て又清シ。況ヤ薄一
暮(ヌ)の第一三の聲を聞クヲヤ (五九七)

没格の「ヲヤ」で呼応することは平安中期以降の訓法
で、かつ(イ)「体言+ヲヤ」と(ウ)「用言+ムヤ」が長く
行われた訓法であったが、やがて(ウ)の場合にも「用言
+ヲヤ」が生じた。管見では平安末期以降である。梅
澤本はその新しい訓法を示している。

「豈」は「ムヤ」で結んで反語となる。

流一年は豈、返ラムヤ老一未ユク身 (九三)

低一昂歩を逐(つ)て豈、風に由ラムヤ (五三六)

従って、次も「ムヤ」を補って訓じた。

豈一圖(らむや)、左一粧の和一親の目を (九五)

「蓋」は結びを平叙する。

落一葉 微一風を俟テ「以」隋ツ。風の「之」カ

蓋一寮シ。(田〇一)

「蓋」の結びは上代では疑問か仮設で、平安初期訓読
では推量形で応じたが、後世は平叙するのが一般的と

なった。源氏物語少女の巻の「風のかけだれ少し」は
右の文送・豪士賦を出典としているが同じく平叙した
例である。

「已」「ステニ」には下に完了の助動詞が応ずる例が
ある。古くはこの方が一般であった。

猿の啼、已に息ムヌ(五八五)

中一腸の「え」已に飽ケルことを知(る) (三四六)

ところが、一方、完了の語を持たないで応ずる例もあ
る。

已に霸一陵を望(み)而思を傷マシム(一〇三六)

琴(の)「之」感已に未シ(田〇一)

そこで、

渭一水一橋の邊に春已に渡(れり) (八四)

の推読に当たっては、今括弧のごとき訓法に従った。

(3) 接続の助字

「雖」には「イフトモ」と「イヘドモ」とがあって、
仮定と既定とによって訓み分けるのが博士家の訓法で

ある。梅澤本でもそれに従っている。

花一鳥は縦(ひ)向一後を期すと雖フトモ 流一年

は豈、返ラムヤ老一来ユク身 (八九三)

瑠一璃(の)扉一薄(へ)シテ相一邀キルと雖(も)

非翫一翠(の)簾疎に(し)て又妨ケ不 (二三五)

後例は意味から考えて「イヘトモ」と読まれたものであろう。さて、「雖」を仮定にも「イヘトモ」と訓ずるに至るのは更に後世のことである。

「則」は付訓がないが、上から「ば」「は」を受け、て「スナハチ」と訓じたものであろう。文集などには付訓例がある。

之を幽一溪ニ着クレは、則(へち)、彩一雲 暖(か)

にシ而黄一鸞出(つ) (三三八)

案一頭には則(へち)添(ふ)、三十一行の「之」

曆一曰を (九八)

「則」字は清原家の訓では、前句に「トキンバ」を補読してこの字は不読としており、遂にはトキンバが

「則」字の訓となったりする。博士家内部でも訓法の相違があったらしい。

「而」は、この字に「て」のヲコト点を加えて上の用言の連用形に続けるか、上の用言の連用形に「て」と加えてこの字を不読とする。「而」は梅澤本では順接の例のみで、一樣に「て」と訓じたものであろう。他書には「シカモ」「シカシテ」「シカルヲ」等の訓が存する。

昔成王の「之」叔一父 周一公 旦 洛一陽をトメ
而 濫一觴シキ (七三三)

居(る)二こと常の座 無(し)、苔を掃て「而」暫(へ)く
莖に代(ふ)

「以」も右の「而」と通じて単に「て」と訓ずる用法がある。但し順接には「テ」と前句に訓ずるが、逆接には「トモ」を訓ずることもある。「以」そのものは接統法としては不読であったのであろう。

盃一酒を酌(へん)て「以」強(チ)に勸む。(略)冷一飯

を加ハフトモ「以」辞スルニと莫レ (ハ二七)

但し次の場合のように用言を受けぬ際には「以て」と訓じている。

魯一聖の以て思(ふ)程 (ハ五三)

敵一國亦、以て子一来シキ(朱) (ハ八九)

呉の強一大ヲシモ「兮」夫一差以て敗(れ)たり

(九七九)

従って、次の「以」は不読であったと考えられる。

風一物を記スルニ、「以」一ニシ難シ (二九)

「者」「モノ」と訓ずることもあるが、次の場合に

は「は」と訓じている。

飛鳥アスガの朝は「者」皇一女也な (ハ五三)

廣一野一姫「者」は公主なり「也」 (ハ五三)

「之」文中の「文」は、体言と体言を結んで、又

は体言を用言の主語として、「の」「が」に読まれる。

太一公か「之」釣ツ 魏ミ徽か「之」鏡 (ハ八〇)

大一項カク一橐タウの「之」同一年 (ハ六六)

峽中の「文」煙 (九六八)

殿一庭の「之」甚幽(か)なる (ハ七一)

但し、連体形の下につく時は「之」は全く不読である。

雪一盡キ(朱) 氷一解(く)る「之」日 (七六七)

「縦」「タトヒ」と訓ずる。「この助字に導かれる句

末はすべて「トモ」であるが、結びは未来形も現在形もある。

縦ヒ、後一會をシテ「能(く)相(結)は(し)令(ム

トモ雨一鬢は邊一地の霜於リモ 白シロカラム (八二四)

縦(ひ)醉(ヘル)面の、「將」桃モト一鏡マフ(こと)無(く)トモ

暫ク愁眉の柳与ト開「クル」(朱) (二二)有リ (六六)

(4) 文末の助字

「也」字は「ナリ」の訓を直接付するもの、或いは

上の語に「ナリ」を讀添えて不読とするもの(既掲

ハ五三)もあるが用言の終止形で結んで「也」は不読とする

例もある。

東平王の「之」舊一里を思フ「也」

文末の助字の例は少なく、「之」の文末用法も見られない。

(5) 打消の助字

「非」は一樣に「ニアラズ」と訓ずる。

靡一々たる月 暖ぬるに非す(五七)

蝶を夢ミルに非す(二五八)

「莫」は「ナシ」「ナカシ」「ナイ」等、形容詞に訓ずる。

悲かなハ「は」「兮」「班」婢めかけ婦めかけより悲かなシキハ莫なシ(三三)

門一人の「之」逮とらフこと莫なイニとを傷いたム(九五二)

洛陽の風一月に遅おそ帰かへること莫なレ(八二五)

「不」は「ズ」「ザラ」「ザリ」「ザル」の訓があり、

「又」は「三更」を意訳して「アケモハテ又ニ」とする中に見るのみである。

全まく獨ひと覺おぼを教しテ「て」空あかを觀みセ不なラシム(七七六)

其の酌しやくを飲のみラ不なルは(九八七)

要するに、平安後半期以降の博士家の訓法を示してお

るもので、「非な」「非なジ」「莫な」「勿な」「不な」「不な」などの訓は存しないのである。

(二) 読添語の用法

原漢文にその語に対応する漢字がないが、訓読に当って讀添える一群の語がある。国語の助詞・助動詞・形式名詞・形式動詞などがこれに当る。梅澤本の読添語は次のものである。(例略)

(1) 助詞 (へ) は例が少なく特殊用法

格助詞 ノ ガ ヲ ト

接続助詞 テ シテ トモ ドモ バ

係助詞 カ ヤ モ ハ

副助詞 ノ ミ (へバカリ) シモ

終助詞 ゴ ヲ ヤ

(2) 助動詞

受身 ル・ラル

使役 シム

回想 キ

完了 リ タリ ツ ヌ

推量 ム (ラム)

断定 ナリ タリ (いわゆる形容動詞の語尾)

(3) 形式名詞

コト カタへ「西ノカタ」・「北ノカタ」など方角にのみ用いる)

(4) 形式動詞

ス アリ タマフ (敬語)

(三) 傍訓に関する諸問題

(1) 動詞の音便形

四段活用の動詞の或語の連用形が「て」「し」「ぬ」に続いて音便を起すことは、梅澤本では一般的だったようである。

(4) 「イ音便」 刺 サイシカハ 掉 サオサイテ 足 アイテ

嘯 ウソフイテ 書 カイテ 乾 カハイテ 坂 マイテ (三)

(例) 卷 マイテ

カ行四段動詞の連用形が「て」「し」「ぬ」に続いた形で、語尾を書いてある語はすべて「イ」となっている。従つて、「て」のみで語尾を示さない語も推読に當つてはイ音便に従つた。

(4) 「擦音便」 極 スムシ心 極 スムテ 蓋 ツムテ 歌 ヤムヌ

息 ヤムヌ 偷 ヌヌムテ 履 フムテ 笑 エムテ 廻 カ

ハシ (なむ) 痛 ヌテ

マ行四段動詞の連用形が「て」「ぬ」に続いた形で、「カヘナム」のみ別。語尾を書いてある語は音便になつている。従つて、推読の部分も擦音便と見て「敵(んて)」のようにした。

(4) 「促音便」 界 サカフテ 紆 マツフテ 倩 ヤトフテカ 磯 ヨ

ソフテ

生 ナテ 沖 ヒキテ 俟 マテ 過 ヨキシ 高弟 ナシ

ハ行四段動詞の連用形・ラ行四段動詞および「ナリ」

の連用形・タ行四段動詞の連用形が「て」「し」に続く際には語尾を表記してある例の大部分が音便形である。しかしラ行の場合には、別に音便形でない、

去サリシ 揺フリテ 鑿ホリシ

の例も存するから、ラ行四段動詞の場合は推読の部分の表記を語尾省記のままに、「去て」「逐て」の如くにした。

(2) 形容詞の音便形

(イ) 「ウ音便」聞クラウシテ 弱ヨハウシテ 正タ、シウ

シテ 清スシウシテ

(ロ) 「イ音便」白シロイことを 易ヤスイことを 莫ナ

イことを

連用形が「シテ」に続くとき、連体形が「コト」に続くときには各々音便が生ずるので、推読の部分もこれに従った。

(3) 「来る」の活用形式

「来る」は八例が連体形で、ヲコト点「る」を付し

ただけである。

秋の気の早く来るか為ナル應シ(三二六)

とあって、「クル」か「キタル」か紛わしい。しかし訓点では力変は用いず、四段動詞「キタル」を用いるのが常道であるから、右は「来(た)る」とした。「キタル」の例は、

陶令重^{キタ}来^{キタ}て来^{キタ}は(六三二)

があり、又、右の二六六を山名切では「早く来ルカ為ナル」と仮名付けしてある。

(四) 対句における上の句末の形式

倭漢朗詠集において、対句の上の句末を終止形に訓読することについては、中条芳子氏の指摘がある(『倭漢朗詠集における対句の読み』國語学三十輯)。梅澤本新撰朗詠は如何というに、終止形に訓ずる例と中止形に訓ずる例とが各々相当数ある。

(イ) 終止形の例

。養（む）得ては昔雀の病を扶ススケ令ム。開（け）来

（た）ては本（より）是（れ）蛙の鳴を得ツ（一五二）

。流（れ）に落（つ）る濃（い）色は秋の風脆（こ）シ。岸を打

（つ）寒（い）聲は晩の浪香シ（二四三）

。翠（い）箔（は）に燈籠（とうろう）て秋歌（あきうた）マたり 碧（い）雲に星透

（い）て暁（あけ）煌（きら）マたり（三五三）

。商（あ）人雪に掉（お）いて漁（い）浦に歌（うた）フ、老（お）将（しょう）霜

を踏（ふ）（ん）て戎（い）楼（ろう）に立（た）テリ（三三三）

。嶺（たかね）を憶（おぼ）鹿（か）は溪（たに）霧（きり）の底（そこ）に帰（か）る、林（はやし）を占（う）む

る鳥（とり）は夕（ゆふ）陽（ひ）の端（は）に入る（四三五）

その他、三三、三六、三七、三九、四一、四六、四八、

七三、七七、一一七、一二四、一二六、一四三、一五五、

一五六、一五七、一五八、一六七、一九二、一九三、二二七、

二四三、二五三、三三三、三三〇、四二六、四三五、四五三、

五六九、六五一、六六一、六六四、六九七、七二二、七九〇な

どが付訓によって終止形の例と知られる。

(2) 中止形の例

。中（ちゆう）殿（でん）の曙（あけぼの）香（か）は吹（ふ）に從（したが）つ染（し）ミ 上（かみ）陽（ひ）の春（はる）の

色（いろ）は煙（けむり）に陶（たわ）セ被（か）したり（五一）

。残（のこ）陽（ひ）、潤（うる）を得（え）て重（かさ）ねて曉（あけ）へくことを甘（あま）ヒ、

曆（れき）一（いち）日（にち）、行（い）を添（そ）へて屢（しばしば）攀（のぼ）ちむことを許（ゆる）

す（一〇一）

。泣（な）（い）（て）露（つゆ）一（いち）珠（たま）を計（か）へて叢（くさむら）の底（そこ）に裏（うら）ミ、愁（なげ）へて

月（つき）一（いち）鏡（かがみ）を望（のぞ）メは嶺（たかね）の西（にし）に含（く）メリ（二八二）

。晝（ひる）一（いち）夜（よ） 和（わ）一（いち）同（どう）にシテ漏（も）一（いち）刻（こく）に迷（まよ）ヒ、乾（かわ）一（いち）坤（こん）洞（どう）

一（いち）朗（らう）として玄（くろ）一（いち）黄（わう）を照（て）す（三三二）

。秦（しん）皇（わう）泰（たい）山（さん）の「之（これ）」雨（あめ）、風（かぜ）黄（わう）一（いち）雀（せき）の「之（これ）」跡（あと）に消（き）エ、

岡（おか）一（いち）穆（ぼく）長（なが）一（いち）坂（さか）の「之（これ）」雲（ぐも）、汗（あせ）赤（あか）一（いち）驢（ろ）の「之（これ）」溝（みぞ）

に収（ま）（む）る（五六〇）

その他六二、七五、一〇七、一二六、一五三、一七〇、一八四、

一八九、二二四、二三七、三三六、三三九、四二五、四三九、四五八、

四七二、六〇二、六〇四、六〇九、七二四、七六一、七七一などが

ある。終止形結びの例が中止形式の約二倍ある。終止

形式と中止形式との用法の相違は、中止形式は必ず動

詞の連用形に限られる。終止形式は助動詞・形容詞・形容動詞の折は必ずこれで、動詞の場合が少しある程度である。

朗詠の訓読法は前述の如く、もとの漢文の訓法を忠実に伝えてゐるから、右の終止形式・中止形式の交用は、漢文訓読史を背景にしていることが考えられる。漢文訓読では古くは対句の上句末は終止形式が一般であつた。それが時を降るに従つて中止形式が多くなつて来た。例えば、知恩院藏大唐三藏玄奘法師表啓平安初期点の訓法と、同じ表啓を含む興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝永久四年(二二六)点を比較すると次のような相違がある。

「平安初期点」

(1) 雲官い軒^ケ一皇^ク一之^ノ境^ノと紀^ヒリ 流^リ一沙^ノ滄海^ノをは夏^ケ
載^ルい伊^ハ一先^ノ一之^ノ城^ノと著^シリ(二表)

(2) 先^ノ一王^ノ(^ノ之^ノ九^ノ一洲^ノ)を(廊^ニにす、百^ノ一^ノ千^ノ(^ノ之^ノ日^ノ一^ノ月^ノを掩^ヒヘリ、烈代^ノ(^ノ之^ノ區^ノ一^ノ城^ノを斥^シ

て恒沙^ノ(^ノ之^ノ法^ノ一^ノ界^ノを納^ル)たり(六表)

(3) 鷲^ノ嶺^ノの微^一言^ハ(は)神^一筆^ニに假^リ(て)「而^{シテ}」弘^クフルこと遠^シシ、鷄^一園^ノ(^ノ與^一典^ノなるは英^一詞^ニに託きて「而^{シテ}」宣^ヒと暢^クフ

「永久点」

(1) 雲官軒^ケ皇^ク之^ノ境^ノ二紀^シ流^リ一沙^ノ滄^ノ海^ノ夏^ケ載^ル伊^ハ先^ノ之^ノ城^ノ二著^セリ

(2) 先^ノ王^ノ之^ノ九^ノ洲^ノシテ百^ノ千^ノ之^ノ日^ノ月^ノヲ掩^ヒヒ、列代^ノ之^ノ区^ノ域^ノヲ廣^クシテ恒沙^ノ之^ノ法^ノ界^ノヲ納^ルタマヘリ

(3) 鷲^ノ嶺^ノ微^一言^ハ神^一筆^ニ假^テ「而^{シテ}」弘^ク遠^ク、鷄^一園^ノ與^一典^ノ英^一詞^ニ託^テ「而^{シテ}」宣^ヒ暢^セム。

のように平安初期点で終止形式の所を永久点では中止形式に変えている。無論共に終止形式もある。

(4) 雲^一和^ノ廣^ク一樂^ク響^クヲ「於^テ」聲^ノ味^ニ秘^サ不^ス、金^一一壁^ノの奇^ハしき珠^モ豈^モ豈^モに彩^ハしきことを「於^テ」愚なる聲^ニに韜^マシメ(む)ヤ 「平安初期点」

(4) 雲^一和^ノ廣^ク一樂^ク響^クヲ「於^テ」聲^ノ味^ニ秘^サ不^ス、金^一

壁奇一珎豈彩ヲ「於」思譬ニ詔ムヤ 「永久点」

永久点は、新撰朗詠集の作者、甚俊の生存時である。新旧両形式の存するのは考えられることである。さて梅沢本では上句末に推読を必要とする例が幾つかある。右の用法差に従って一応、助動詞・形容詞・形容動詞の折は終止形としたが、動詞の場合もまた古形の終止形に従って推読した。

「後記」梅沢本新撰朗詠集の調査・解説の機に恵まれたのは松田武夫・吉田幸一両博士の御配慮による。又吉田博士からは貴重な文献をも貸与された。山名切の調査は小松茂美博士の御厚志に依って出来た。三博士および梅澤彦太郎氏に厚くお礼申上げる。

(昭三十七年七月二十五日初稿、三十八年一月二十六日再稿)